

世界氣象觀測報告書 ③

氣象觀測協會 W R A

赤 軍

NO. 15

共產主義者同盟赤軍派 (日本委員会)

中央宣伝局機關紙部発行

目次

一、第三回中央委員会 公 示	中央委員会	3
二、第三回中央委員会 組織報告	中央委員会	4
三、公然大衆闘争の武装展開で、三里塚現地闘争に進軍す！	宣 伝 局	6
四、小ブル諸雑派の大動揺と社会排外主義へのなだれうつ屈服について	万 城 弘	11
五、反帝国主義運動におけるプロレタリア的戦術について！	中央組織局	23
六、「世界革命戦争戦略」II 反帝プロレタリア革命戦争論序説	北 川 明	28
七、「綱 領 草 案」	.....	36
八、《通信欄》「暴力」についてもう一度考える〜一新聞記者として〜	Y・M	43

## 戦路 スローガン

- ◎万国の労働者被抑圧人民は団結し 世界革命戦争―世界プロ独―社会主義―共産主義建設の共産主義革命に勝利せよ！
- ◎世界同時革命勝利！
- ◎国際帝国主義を反帝プロレタリア革命戦争―世界革命戦争で打倒し 世界プロレタリア独裁を樹立せよ！
- ◎現代日和見主義―現代修正主義を粉碎し 世界党―世界赤軍―世界革命戦線を建設せよ！
- ◎日本プロレタリアート人民は 反帝植民地革命戦争を世界革命戦争に揚棄し 国際帝国主義の侵略反革命戦争を粉碎せよ！
- ◎侵略・抑圧・反革命―差別分断支配攻撃粉碎！
- ◎安保―NATO―ASEAN―国際反革命同盟粉碎！
- ◎米帝国主義の対日反革命粉碎！
- ◎日本帝国主義打倒！
- ◎社会民主主義―社会排外主義勢力の反革命策動を粉碎し プロレタリア独裁の権力機関―世界革命戦争の闘争機関―臨時革命政府(革命戦線政府)を樹立せよ！
- ◎非合法中央集権―職業革命家の党、軍事組織―労働者地下細胞の党を全戦線に配置せよ！
- ◎党の軍隊を中軸とする革命武装勢力建設！
- ◎労働者を基礎とする被抑圧人民の統一戦線建設！
- ◎反帝プロレタリア革命戦争を闘い取る正規の攻囲建設！

## 第三回中央委員会 公 示

中央委員会

- 一、一九七八年×月×日より×日にわたって、××に於いて、第三回中央委員会が開催された。
- 二、最初に統制局責任者より、本中央委員会参加者の全員が中央委員会参加の資格を有している旨の報告があった。
- 三、次に第二回中央委員会で選出された議長の辞任のあいさつが行なわれ、満場一致でこれを承認した。
- 四、次に第三回中央委員会の議長が全中央委員の中から選出され、そのあいさつが行なわれた。
- 五、次に組織局責任者より「組織報告」が提出され、長時間の討論のうえ、満場一致でこれを承認した。
- 六、次に国際局責任者より「国際報告」が提出され、長時間の討論のうえ、満場一致でこれを承認した。
- 七、次に防衛局責任者より「防衛報告」が提出され、満場一致でこれを承認した。
- 八、次に宣伝局責任者より「宣伝報告」が提出され、長時間の討論のうえ、ひき続き討論を続けていく事が確認された。
- 九、次に軍事組織部責任者より「軍事情勢」の報告がなされ、長時間の討論のうえ、数点の保留点を残し、満場一致でこれを承認した。
- 十、次に中央委員××よりプロ独運動論に関する「意見書」が提出され、長時間の討論のうえ、ひき続き討論を続けていく事が確認された。
- 十一、次に人民組織部責任者より、本中央委員会に提出された下部からの意見書十八通決議三十二通のそれぞれがなされ、長時間の討論のうえ、それぞれに関する適切な処置を、満場一致でこれを承認した。
- 十二、次に中央委員××より機関閉鎖となっている書記局の再開に関する動議が提出され、長時間の討論のうえ、責任担当者を選出し、満場一致でこれを採択した。
- 十三、次に中央委員××より党大会に関する動議が提出され、長時間の討論のうえ、党大会開催にむけた準備を更に進める事が確認された。
- 十四、次に中央委員××と××より全国政治新聞の定期発刊に関する動議が提出され、長時間の討論のう

え、全国政治新聞の定期発刊にむけた準備を更に進める事が確認された。

十五、次に中央委員××より三里塚闘争に関する動議が提出され、満場一致でこれを承認した。

十六、次に統制局責任者より復党者×名の報告があり、満場一致でこれを承認した。

十七、次に組織局責任者より、一中委採択の『綱領・規

### 第三回中央委員会 組織報告

中央委員会

#### 目次

第一章 非合法党の組織政策、その土台の獲得

一、組織戦の飛躍と地下陣型の拡大（以上本号）

二、党の独裁と加入—組織戦術の止場

三、七七年秋軍事攻勢と第二期中央軍拡充運動

第二章 プロ独—戦争派の大衆的登場

一、プロ独運動論の確立

二、三里塚闘争での進撃

三、全国政治新聞の発刊について

第三章 権力闘争と権力運動

約草案』の修正と採択の動議が各級機関の意見書の報告と合せてなされ、満場一致でこれを承認した。

十八、最後に議長より、本第三回中央委員会が全員の真摯な討論の中で、圧倒的な勝利の中央委員会として勝ち取られた事のあいさつが行なわれ、満場の拍手のうちに第三回中央委員会は閉会した。

一、二重権力問題について

二、共産主義権力の内幕

第一章 非合法党の組織政策、その土台の獲得

一、組織戦の飛躍と地下陣型の拡大

党は組織されたプロレタリアートの意識であり前衛である。しかしプロレタリアートの唯一の組織ではない。プロレタリアートは資本との闘争に欠く事のできない、その他の一連の組織を持っている。労働組合、協同組合、工場委員会、議員団、婦人組織、青少年組織、消費者組織、地域組織、そして新聞や文化組織、それに革命的闘争の時には革命的行動組織、コミューン、ソヴェト、あるいは連力の組織に対して、一般的政治方針をつくりあげるのに十分な経験を積み、その権威によって、その他のすべての組織がこの方針に従うよ

う刺激する事のできる中央組織は何なのか？ この組織こそプロレタリアートの党である。党はプロレタリアートの階級の最高の組織である。

プロレタリアート総体に一つの階級の意志は存在するであろうか？ そして党は『大衆の意志に従う』立場に立つ事ができるであろうか？ 否である。プロレタリアートの内部には幾多の異なった意志が存在している。そしてそれは、その意志の発生してきた基盤、すなわち資本主義社会の意志とは無関係ではあり得ない。党は全ゆる大衆の利害を『代表する』が、大衆の一定の部分、すなわち共産主義をうちたてる為、革命的手段により現行制度を打倒しようとする、この最も進んだプロレタリアートの意志だけを実現する。『我我は、階級の党である。だから、階級のはとんど全体が（そして、戦時や内乱時代には、完全に階級全体が）我が党の指導のもとに行動し、できるだけ緊密にわが党に同調するにちがいないのである。だが資本主義のもとで、いつかは階級のはとんど全体、あるいは階級の全体がその先進部隊の、その社会民主党的意識性と積極性まで高まる事ができると考えるのは、マニローフ気質であり、『追随主義』である。資本主義のもとでは、労働組合組織（より初歩的な、また未発達な層の意識にとりより受け入れられやすい組織）でさえも、労働者階級のはとんど全体、あるいはその全体を包括する事はできないという事は、これまで分別のある社会民主主義者のだれ一人として疑った事はなかった。『一歩前進、二歩後退』、『党は階級の先進部隊として、できるだけよく組織された分子だけを加入させなければならないという、自分の願望、自分の要求を、まったく明瞭、また正確に言い表わしているのである。これに反して、私の論敵は、党に組織された分子と未組織の分子とを、指導に従うものと従わないものとを、先進的な人々と手のつけやうがないほど遅れた人々を—というの手のつけやうがある遅れた人々なら、組織に入れるからである—混同している。この混同こそ、真に危険なものである。

：、実際、労働者階級の先進部隊としての党を、階級全体と混同する事は許されない事ではないか。』(同上)

党はレーニンのこの命題を階級に与え、全ゆる自然発生性の中に注ぎ込み、階級の内部でのブルジョア性と闘争を続けながら、大衆一般から意識した階級へ、共産主義者、そして党員へと、階級の発展を勝ち取りながら、資本主義—国家—市民社会の底流に、階級の目的意識性を、いわば共産主義—シェーマとして、つまりは共産主義権力として創り出す。党は権力であり、共産主義者はその権力を体現する。資本主義の中での共産主義権力の存在こそが、社会主義と共産主義革命の根拠である。

党が非合法である事はこの事のみ規定される。不可視の党は、そうであればただその実体性と権力性を有し得る。そしてその党の建設の関いは組織戦術の関いではなく、共産主義革命の戦略であり、資本主義権力との様々な戦争を、すなわち階級間戦争を、革命戦争を通じてのみ展開される。党が、単なる労働者活動家の組織ではなく、職業革命家の組織であり、軍事組織の党だからである。そして党がその非合法性とそこからの権力行使が、過渡的なプロレタリア権力—プロレタリア独裁の一切の保証であり、すなわち党の独裁がプロレタリア独裁の内実であり、全てである。この事を曖昧にするのは、しよせん日和見主義の道をころげ落ちるしかない。『「党の独裁か、それとも階級の独裁か？」という問題の立て方そのものが、まったく信じられないほど、手のつけられない思想の混乱を証明している。人々は、何かまったく特別な種を考えたいというと努め、利口ぶろうと熱中するあまり、物笑いの種になっている。誰でも知っているように、大衆は階級にわかれており、大衆と階級を対置する事ができるのは、社会的生産体制上の地位によって区別されていない、膨大な多数者一般や、社会的体制の中で特別な地位を占めているカテゴリーに対置させる場合だけであり、階級を指導しているものは、普通大多数の場合、すくなくとも近代の文明国では、政党であり、通則として、政党を支配しているのは、もっとも

権威があり、勢力があり、経験に富んでいて、もっとも責任の重い地位に選ばれ、指導者と呼ばれる、多少とも安定したグループである。』(『左翼小児病』) 『共産主義へ移行するにあたってプロレタリアートの独裁は避けられないが、この独裁は、工業労働者を一人のこらず組織する事によつては実現されない。；；独裁を実現できるのは、階級の革命的エネルギーを吸収した前衛だけである。』(『労働組合について』)

党を中心とするプロレタリア権力の形成とその拡大は、それが権力奪取に至る過程にあつても、党の独裁、党の全政治闘争の集中的牽引が最も重要な基礎であり、党の独裁のみ、プロレタリアートの自己権力、プロレタリア自決権力としての官僚、国家の追放がその発展を唯一保障されるのであり、その党の独裁という徹底した党の側からの統制、集中、規制とその権威は、党員のみならず全ゆる先進的プロレタリアートに対して、闘いの指標を示し、闘争

## 公然大衆闘争の武装展開で、三里塚現地闘争に進軍す！

Ⅱ 宣 伝 局 Ⅱ

全国全世界の同志諸君！ 全ての闘う戦友兄弟達！ 世界革命戦争が増々全世界の階級闘争を世界プロレタリア独裁へむけて権力闘争としての単一化を進めつつ、その不可避の運動が日帝内階級闘争を更に激化した階級間激突―権力闘争としての発展を明々白々のものとする中、国内階級戦争の今日の攻防の第一の大衆の高地たる三里塚闘争は昨春の五・七攻防をうわまわる形で、今春の三月―五月の激闘が、既に全人民的闘争という大衆自からの徹底した自然発生の反政府闘争―武装闘争として、日帝権力と正面からの戦争対決の持続化を戦取してきた。まさしく、この七〇年代に入って以降の数年来、久しく人民の忘れさせていた国家権力との直接攻防をこの数カ月の三里塚闘争は再び全ての人々に生々しく再現させ、人民の自

進軍を、将に様々な闘争形態をもつてして闘い抜いて来た。とりわけ、今春の三月―五月の連続闘争は三・二六―五・二〇を二大頂点として、大衆的ゲリラ戦―大衆武装闘争―実力闘争の三種の大衆闘争上の戦術を駆使し、他の左翼グループを目に見えぬ形で軍事化―急進化させつつ、帝国内革命戦争の大衆的公然の前線としての三里塚闘争を更に明確に固定化したのである。この三里塚闘争を巡つての我が党の大衆闘争上の指導方法と党経営―党員配置の経験は、更に拡大するであろう今日の帝国主義内部での自然発生的な反政府闘争―抵抗闘争の全人民的拡大に対して、そのいわば民主主義闘争の自然発生的性に対していかなる結合といかなる指導を共産主義運動―党の側からなせば良いのかという問いに對する答えとして、実に多大なる教訓を与えたのである。

同志諸君！ 戦友兄弟達！ 恐れる事なく革命戦争―世界革命戦争の闘いに前進せよ。そして我が党の指示のもと、更に大衆闘争を拡大させ領導し抜き、その地下―非公然の大衆闘争の指導を明確にプロ独―共産主義革命と党建設に結合させよ。我が地下革命党は帝国主義権力はもとより大衆自身も気付かぬうちに、全ゆる大衆闘争を革命戦争―世界革命戦争の前線へと前進させるであろう！

## 「爆発するゲリラ、火炎ヒンそして実力突入」

この数カ月間の三里塚闘争で我々が勝ち取った地平は、武装闘争や軍事行動が何かしら一部の、大衆闘争とまったく分断させられた部分による一党主義的なゲリラであるかの如く敵から宣伝され、また味方内部にもその種の考えが広がってしまっている今日の状況で、再度武装闘争そのものの戦術としての展開が、決して一部の者だけの戦闘的な特許ではなく、戦術として見るならば、大衆の自然発生的性そのものが階級間戦争―激突へと逢着する段階にあつては、不可避に様々な軍事的色彩を帯びて登場する事、そして共産主義運動

の真の目標を与え、その勝利の客観的法則を明らかにし、闘う信念と思想、そして生きて闘う事の世界観を、将に唯一の共産主義として与え得るのであり、彼らに對して「生きる」事の意味を、共産主義者としての生涯の位置を、指し示す事ができるのである。

プロ独運動とプロ独樹立、その闘いの中で党の独裁とその下での指導、これは決して譲る事のできない我が党の絶対的的基本であり、中央集権主義の内実であり、そして、この数年間の組織的闘いはこの事の集中的勝利をもつてして、党の非合法性と中央集権性、そして軍事組織の性格が、帝国主義国内の階級戦線の中で、帝国主義ブルジョアジー―官僚、常備軍、政治警察との直接攻防を、勝利的に貫徹し得たその根拠である。

我が党の党機関及び党組織、党員及び党指導者と、我が党の直接関与する現場―戦線はこの数年間で、圧倒的に拡大され、党の影響力は増々強まった。(以下次号)

然発生的闘争が不可避に権力闘争の質を要求せざるを得ない事を再度明らかにしたのである。

世界プロ独―共産主義革命にむけた帝国内革命戦争を非合法中央集権職業革命家の党―軍事組織―労働者秘密細胞の党を中核として、その地下からの共産主義闘争の指導を単一的革命軍―革命戦線の統一戦線である赤軍の更なる拡大と、他方での配置された大衆的部署での大衆戦線の一員としての党の指示のもとでの大衆的闘争を組織し拡大し、それを共産主義運動―党へ結果させる、その闘いを困難な地下―公然闘争として貫徹し抜いて来た我が党は、この三里塚闘争に對して、全党員の全力突入を大衆闘争それ自身として戦取する事を指令し、全党員はそれぞれの党の部署で総力をあげて三里塚

―党にとつて重要な点は、その大衆の自然発生的な軍事的急進的な闘争の拡大に對して、その自然発生的性を共産主義運動―権力闘争の目的意識性と区別するあまり、それを將に自然発生的性として押し留め批判しそして切り捨てるといふ「捨象の戦術」ではなく、その自然発生的性を大衆闘争のそれとして党員が大衆闘争の内部で積極的に担い、闘いを組織し、その先頭に立つ事で、それ自身の自然発生的性を徹底して拡大しつつ、同時に政治闘争―権力闘争としてのその限界を政治指導の中で指し示し、真に「勝利する陣型と戦術」をプロ独―共産主義革命―革命戦争の側から与えるといふ「止揚の戦術」こそが要求されるという事を単に理論上の問題から、現実の階級闘争―大衆闘争の実践上の問題として具体的闘争を通じて明らかにした事である。

そして同時に、この三里塚闘争での大衆闘争の軍事的展開は、それを非公然に規定する「組織された軍事」としての革命党と革命軍(赤軍)の数年來の一貫した軍事的蓄積をもつてして、はじめてその組織の党員からする計画的準備と指導、そして組織化が、大衆戦線の武装と軍事化、大衆闘争の武装的展開がなされたのだという事を明らかにしたのである。

我が党員達の活躍は実に重層的であった。第一に中央軍党員と幹部党員を中心とする部隊は、それぞれが配置されていた大衆的部署―大衆戦線の中で、この数カ月間、將に大衆闘争の今日の決定的頂点が三里塚である事を暴露し、一部の秘密フラクションのみでなく機関―組合総体に對して三里塚への取り組みを主張し、公然たる三里塚闘争の宣伝―煽動を闘い抜き、しかもその闘争が確実に実力的武装的展開を不可避とする事、その事から今日のファシズム―社会排外主義攻撃との対決の大衆的陣型のあり方を指し示し、権力―民間のみならず権力闘争を大衆包囲という左翼反対派政治でもって回避する傾向をも批判しぬき、新たな労働者の組織―労働者の権力実体が要求されている事をつきつけた。その組織化の闘いは、この党員達にとつては將に長く苦しい闘いであ

つたこの数年間の非合法活動の蓄積と、その中で打ち固められた共産主義者としての思想的核心を、ひきかたがかりで一部のフタクシンの者だけでなく公然たる場所を通じての大衆の発言として展開できる事は、まったく喜びに身体がふるえんばかりであったであらう。

一部の大衆現場からは「公然すぎる」との危惧も出されていたこの三里塚闘争を通じての一挙的な大衆闘争の左傾化は、しかし、現実の闘争参加者の拡大とそして現地闘争でのそれらの部分の率先した火炎ビン闘争の主張と行動という形で、もの見事に勝利をおさめたのである。

左翼グループの中に配置された党員の活躍も含めて、大衆戦線—左翼グループの急進化武装化を自然発生的ではあっても創り出してきたこの大衆闘争の中での闘いは、革命戦争への意識化した陣型建設として更に拡大しつつある。

三・二六—五・二〇を頂点として我が党員と大衆戦線部隊の火炎ビンでは三里塚の荒野に革命戦争の火を放った。

第二に大衆戦線そのものの路線として革命戦争—プロ独樹立—赤軍建設を掲げる部隊、とりわけ三里塚現地に常駐する部隊は、将に日本革命戦争の大衆の陣型と大衆の前線に更に拡大すべく、この数年間の現地での様々な軍事的蓄積をテコに、真に革命戦争と直結する戦争行動として、現地での持久的ゲリラ戦を組織し闘い抜いてきた。

もとよりその大衆戦線がたとえ路線として革命戦争—赤軍建設を確立していたとしても、その中で不断に発生する自然発生への洋脆の傾向と闘い抜かなければならないのは当然である。それは一方で民主主義運動への固定化—反政府政策阻止闘争としての現地主義か、あるいは軍事戦闘団主義としてのテロリズムへの純化の傾向という、常に登場してくる経済主義の二様の傾向であったし、その両者を止揚しつつ、持久的なゲリラ戦を大衆闘争それ自身として創り出し、大衆戦線自身を公然—非公然の二重構造に、そしてその

闘いと戦術を多様な形態として展開しつつ合法—非合法の戦術的連結を確立するという闘いは、その戦線に配置された党員にとって中央軍での闘争に比しても劣らない困難な闘いを要求したのである。しかし、この戦線の党員達は見事にその任務を貫徹し抜いた。それは戦闘に於いてそうであったのみならず、その戦線の他の党員配置の大衆組織の結合という陣型拡大も含め、その戦線の三里塚闘争の中で占めていた位置は大きな意味を有していたのである。

数年間の闘争蓄積とその中で一歩一歩進められてきた組織の軍事化と非公然闘争の確立化は、この七七年から七八年の一年間の闘いを通じて更に軍事的にも組織的にも強固な形態でもってして確立された。

将に大衆戦線がいかにして持久的なゲリラ闘争を組織し展開するのかがこの点についての明確なる実践的回答を、この大衆部隊とその中に配置された党員は明らかに示したのである。

一部の諸君の様に、自己の闘争を「軍報」と称する宣伝カンパニアでもってそれ自身の闘争をわい少化する事を我が党は決して来なかったし、またこの大衆戦線はしようともしなかった。ゲリラ戦闘とは誰がやっても良いのであり、また誰れもがやらなければならないのであり、それを自分でやったりと証明したい者がいればその者に証明してもらえば良いのである。ゲリラとはただ算帳の中でひたすらゲリラに徹する者のみに与えられる栄光であり、その成果は戦術としての結果で見れば実に軽いものでしかなく、ただ重要な点はそのゲリラでもっていかかに大衆が勇気づけられその闘いへの戦意と積極性を創り出したかであり、同時にゲリラ主体そのものがいかに軍事的思想的に強化されたかである。ゲリラとはその闘争形態の多様性だけでなく、ある時はその闘争主体そのものも多様な組織形態と組織名称を有して良いのである。やっただ事に変わりはないのである。宣伝はその時点その時点での宣伝方法を考えれば良いのである。

第三に忘れてはならない部隊として、将に大衆部隊の様々なる部

分の全国的結集の地平がある。

労働者秘密細胞として配置された我が党員達は、実にありとあらゆる形態でこの三里塚闘争に大衆部隊として全国各地から結集したのである。

各労働現場や組織内部で三里塚に結集するという事を公然と掲げてその組織内での闘争を展開する事は、今日の情勢下の中であまりにもそのファシズム統制が強化され、組合—民間も含めての弾圧体制が、この大衆闘争としての三里塚闘争に対しては強化されている中で、我が党員達はその統制を逆手にとってそれまでの、密かに潜み地下サークルへの結集を計っていくという大衆戦術を一歩進めて、それと技術的に区別した形で、各部署に於ての公然たる大衆闘争への決起—三里塚への結集を宣言し、それを組織化し抜いたのである。ある者は組合有志として、ある者は青年部として、そしてある者は市民運動として、また個人として、三里塚に結集し政府打倒の闘いに参加する事を明確にし、それへの支援参加を訴え組織し抜いたのである。

この闘いは、今日までの多くの非合法組織や活動家が、たとえば反日武装戦線の戦士諸君に見られた様に、ひとたびその者が非公然軍事活動に従事するやいなや、まったくの「一般市民」として市民社会に溶け込む事ではかその非公然性を保ち得なかった、あるいは保ち得ないという「神話」に対して、将に共産主義組織—非合法党の政治組織路線の問題としてその傾向を実践的に批判し抜いたのである。

その諸君の主張してきた「人民の海」が、ただ単純に複雑化した市民社会の混在性としてだけ指定されてきた事が、彼らの組織戦術での限界性だけをとってみても明らかなのであり、もしそれが「人民の海」と呼びたいのなら、それこそ非政治の意識と強い者に屈服迎合するという強制された国家統治下の「人民」への自己解体を通して、すなわちそれは自己の武装解除を通してのその社会への一員としての混入という事になるのである。

その「人民の海」とはゲリラにとつてのそれではなく、権力にとつての「人民の海」でしかないであらう。

我が党員達は、市民社会の奥深く存在しながら、しかしその市民社会に常に敵対し挑戦する。すなわち、この抵抗闘争—大衆闘争の不断の展開の中で、その周囲の人々を覚醒させ意識化させ、そして大衆闘争へたとえ直接的ではないにせよ参加させる。この自然発生的のうねりこそが、党の目的意識性である、軍の戦術的行動性を保証する、防衛する大きな「人民の海」なのである。あるがままの人民は決してプロレタリア階級意識を持ってはいるはずもないし、また持っているはずもないのである。それは主体的に持てないのと同時に、ブルジョアイデオロギーの包囲は、持つ事を許さないものである。

市民社会の中に存在しながらそれと闘う事を通じてのみ、党とプロレタリア階級はうちきえられるのである。

三里塚闘争へ様々な形態での結合、大衆闘争としての参加を勝ち取った我が党の党員達は、この市民社会とのブルジョアイデオロギー—対プロレタリアイデオロギーの対決という、いわば党派闘争を闘い抜く中で、逆に自己の非公然軍事活動を防衛し抜きながら公然と大衆闘争に参加しその先頭に立ったのである。

この部隊の現地での闘いは、他の部分の持久的ゲリラや火炎ビン闘争に優る肉弾での実力闘争として、機動隊の阻止線への幾度ももの突撃をくりひろげたのである。

そして、戦術的展開の部分の総括の最後に、我が党がすでに幾度となく呼びかけて来た「誰にでもできるゲリラ」のそのひとつの多大なる成果を報告しておかなければならない。

たった一回の電話や、小包み、消火器で飛行機は止まり、あるいは警備部隊の行動を拘束できたという「ゲリラ」についてである。

五・二〇闘争を前後する、我が党の組織的な着手とは別に、表に無数の「無名の人々」による、「ゲリラ」が全国各地で展開された。敵権力もその実態把握に未だ成功していない。これらの大衆の創意工夫による権力への挑戦が少なからず敵を動揺させ消耗させそして

混乱させてきた事を我々はうたがわない。

我が党は、今後確実に三里塚空港を巡って闘われるであろう全ゆるる形態をもつてしてのゲリラ―革命戦争に対して、更なる全ゆるる人々の創意工夫に満ちた「戦争参加」を望むし、その後方からの援護を切に要請する。

敵は謀略電話やニセ爆弾に対してはその対処すべき術を知らないのである。

(尚ここで若干の技術的経験を参考にしてみたいが、日航等への電話は逆探知される。従って公衆電話を必ず使用すべき。逆探知は最少一分半―三分と見ておけば良い。また「爆破機」については事前に各便の番号と発着時刻等を時刻表で確認しておく事。その点が不明確な時は相手が「混乱」しすぎてウソになる。消火器等の指紋はもろんの事、各ナンバーも絶対に消しておく事。また七一年頃の「流行」であったシヨルダーバッグから少しリード線をはみ出させた者や、電池やリード線を入れたものなどを再度「流行」さすのも一考かと……)

### 「三里塚の地帯を全国の大衆闘争に拡大し

#### 帝国内革命戦争へと運動させよ」

今春期の三里塚闘争に対して我が党はその持てる力を全て投入し、大衆闘争の階級間戦争としての爆発的激突をその大衆闘争それ自身の中で確立させ、全ゆるる大衆闘争形態を擁してこの三里塚の戦闘に参加してきた。

それは表面的形態はたとえ大衆戦線としての取り組みがあったとしても、しかしその内実は何れ我が党にあっては戦争への計画された進軍であった。

そしてその闘争の勝利をふまえて、次に我々に課せられている任務は、この全人民的闘争としての三里塚闘争の質を、一方で現地の持久的闘争として確立しつつ、それ自身をその闘争の自己発展を通じてプロ独―共産主義革命の大道に世界革命戦争へと止揚し抜く

まったく理解できない政治警察の出遅れた対応の無意味さを暴露している。

すでに政治警察と我々との攻防が他の左翼グループのそれとは線を画し、互いに非公然地下戦争として開始され闘われている事を一番確認しているのは政治権力自からに他ならない。我が党と軍が、すでにこの三年有余政治警察の主要部門を徹底して捕捉し、その一員一員を家族構成から通勤経路まで、今日まで彼らが革命組織にできた基本的調査活動を我々の索敵活動としてびっくりと展開してきた事を、最も恐怖しながら確認しているのは彼らなのである。我が党を捕捉し得ない政治警察は全国各地で恐怖にかられながらもやみくものガサ―不当逮捕を我が党から更に適確にはずれたところで繰り返している。あるいは、他の事件でガサ入しした大衆戦線の一部からデカの顔写真が出て来たといつては「スワ！ 赤軍だ」とさわいでいる。ある者は尾行がついたと上司に報告し、その数日後家族もろとも引越していつている。それも我々の監視付きでだ。機動隊は家族を残して三里塚に行くのを怖がる。残された家族の安全を確認できないからだ。デモ警備に対しても写真に撮られる事を最も恐れる。警察官が警察を信用できなくなっているのだ。

そしてそのひとつの結論が、かつては「ゲリラ」と言えば誇大報

闘いを戦取する事であり、赤軍建設と党への結果をつくり出す事である。そして他方で、この三里塚の大衆闘争を再度全国各地の大衆闘争に逆流させ、全ゆるる地域で全ゆるる戦場をそして全ゆるる人々の中で、この三里塚の闘争と結合しうる大衆闘争をつくり出しつつ、その大衆闘争を民主主義闘争―反政府闘争から権力闘争―共産主義革命の政治闘争へと止揚し抜く地下陣型をその大衆闘争内部で確立しゆく事である。

そしてその環は、将に日帝内に於ける全国的な革命戦争―内戦の拡大であり、階級分化を通じての階級間戦争の公然化である。

ある意味で、我が党がこの三里塚闘争に公然たる大衆組織を通じての大衆動員と、そして重層的な戦術的展開を戦取し得たのも、この党の基本戦略を各部署にあって実践する事を通じてのみ初めて可能であったのであり、そして同時に全党―全軍の七六年以降の戦争突入態勢と、とりわけ七七年秋の赤色報復戦の全国的展開のその軍事的地帯を踏えて可能となったのである。

我々は、大衆闘争の公然たる進軍を背後にそれをうまわる非公然の軍事行動の存在が不可避である事をいくら念をおしてもおしすぎる事はないと考える。

七五年の計画された地下組織戦の拡大とその勝利、そして七六年二中委以降の殲滅戦態勢への突入、その闘いの中で強化され訓練された軍事活動の地帯、それらの闘いがそれを補完する破壊戦―サボタージュ―プロバガンダゲリラと結合しつつ、七七年秋の一大軍事攻勢を他の大衆部隊をまきこみつつ戦取されたのである。とりわけ七七年秋の軍事攻勢に対して党中央軍を中心とする戦闘団が、統一革命軍―赤軍の意志統一のもと共同軍事行動を勝ち取った事は壮大な成果である。そして他方、これを徹底して恐怖する日帝権力が、東京―大阪に於ける赤色報復戦、その同時多発性を隠蔽さす為には、すでに我々の戦争が一般的な武装カンパニアから前進し、適確な一個一個に対する破壊と殲滅を中心とする戦闘に入っている事を、

道でのキャンペーンをはっていた政治警察が、今度是我々の闘争となると報道官制をひいて、なかった事件にしてしまふ。

今回の三里塚闘争の数か月間であっても、誰が黨員であるのかを判断し得ぬ彼らは、実に膨大な部隊をもってマトはずれな二四時間尾行とガサ、デッチアゲ逮捕を秘密のうちに繰り返してきた。しかし、唯の一人もが黨員―充ンバをも発見する事はできなかった。ガサで一冊の我が党のパンフが出てくれれば歓喜の声をあげたという御同情申しあげる。しかし今の我々がこれらの左翼グループのように左翼パンフや書物、ましてや自己の党機関紙を大事に持っているなどと考える方がおかしいのだ。我が黨員は「赤衛」や指令書をふくめてももちろんパンフも一回の精読で焼却処分している事ぐらひは容易に想像できるであろう。

我が党はこの勝利した組織戦と軍事活動の地帯を更に防衛し抜き、そして大衆指導を強化し、かつ三里塚闘争を直接担う事での戦取した多大な教訓を全国の配置された大衆的部署で実態化しつつ、総体をプロ独―共産主義革命と赤軍―革命党建設の革命戦争の高地へと止揚し抜くであろう。

☆ゲリラ戦の正面的大攻勢に向けて、各大衆戦線の指導を強化し、中央軍拡充運動に結合させ、赤軍を更に強化増強せよ！

### 小ブル諸雑派の大動揺と社会排外主義へのなだれうつ屈服について

万城弘

七〇年代後半での階級対立の非和解的激化は一切の諸政治勢力をいやおうなしのふるいにかけ、ファシズム派とプロ独派との直接的対立構造を増々鮮明なものにさせつつある。六〇年代後半の階級的対決の関門を本当はくぐり抜ける事ができず、しかしただ帝国主義ブルジョアジーの側の許容によって延命する事のかろうじてできたこれら諸勢力は、帝国主義ブルジョアジーのなりふりかまわぬ攻撃

的階級再編の中で、自らの許容範囲を更に帝国主義ブルジョアジーの許しうる地帯へと拡大純化させつつ、最終的な帝国主義本国内反対派の政治的安全地帯を帝国主義ブルジョアジーの側から与えられようとしている。端緒的時代での特徴的表現は何れその本質をその後数年を経ぬ今日あらわにしているのである。六九年の時代要求に対する解答のいかんはそれぞれの政治的方向をすでにその時決定さ



せていたのである。

我々は、この膨大な小ブル諸雑派の大動揺に対して、今日改めて何かから批判の内容をあえて提出しようとは思わない。それぞれに対する批判はすでに六〇年代後半で六九年のあの激動期に一定させているからである。我々は、その様な小ブル諸雑派の彼らに対して、その時点ですでに党派としてではなく、単なる大衆運動の戦術の先遣部隊でしかないという政治的判決を下した。問われていた革命と権力問題から逃亡する事で自己完結してしまつたこれら急進的大衆としての諸派に対しては、党的批判のそれ以前に、まず何よりも彼らの、たとえ大衆の自然発生性・小ブルの急進性のものであつたとしても、一定の大衆の地平での評価とそれへの支援・助力を与える事を、まず我々の第一の彼らに対する接点の基本に置かねばならないであろう。つまり反帝闘争内部にあって有形無形に大衆的結合として彼らとの接点を確立し、それを土台に反帝闘争の全体的拡大を創り出し、そしてねばり強さをもって彼らをして政治化させ、政治闘争すなわちプロ独―共産主義革命への大水路へと彼らを大衆闘争それ自身として押し上げてやらねばならない。

従つて、彼ら小ブル諸雑派は今日否応なしに我々プロ独―共産主義革命の階級的勢力と反帝闘争での同列化を余儀なくされているのであり、その事による有形無形の影響を、もし受ける事を拒否しようとするのであれば、その時は自らの大衆の基盤である最後の延命の場所をも失なう事になるであろう。今日のカクマルがそうであるのを典型的に。しかしながらすでに数年前の事実が明らかにしているように、今日すでに党派としての政治性を一切解消させてしまつていられるそれ以外の諸雑派は、將に大衆運動の急進性でしかその自己の意義を見出だせぬようになってきており、革命の時代に於ける自己の不安定な政治的立場についてそろそろ理解をし始めている様にも思える。しかも、より一層屈服する形である。

この状況を客観的に見る事をもってして、すでに以前より確認されてきた総体的な政治批判の一定の現実的結末というものを、今その様なものでしかなかったが故に、彼らに参加をしてきた「党派」と称するグループが、「いかなる情勢にもいかなる任務にも対応しうる確固たる前衛」という基本的性格を喪失し、右に左に流転を繰り返してきた事をこの人々は未だに理解しようとしていないし、理解できない。

我々は今一度共産主義運動の一般的命題を、マルクスやレーニンのそれに対する多大の労苦を思い起こす事から、革命の問題の課題的接近を計らねばならないのではないか。しかも教条主義的にではなく、である。

「党派闘争」の環に我々はそれを定律化したいと思う。尚我々はここで、特定のグループをひとつひとつあげてそれに注釈をつける必要はないであろう。ある人のように実に丹念に個々のグループを色わけしそれに烙印を押してゆくやり方は、個人の分類的趣味を満足させる範囲を越え得ぬであろう。そんなものは革命にとって何の利益も齎さない。

我々はひとつのグループであっても幾種類かの傾向の誤りを持っている事を指摘するし、それ故にその傾向それ自体を問題にしてゆく事が第一に重要であると考える。

### 一、経済主義―組合主義への純化

運動論的には大衆運動主義とも称されるこの傾向は、階級闘争の歴史上に実に多彩な顔ぶれとして登場してきた。本来の日和見主義と深く結びつたこの傾向は、階級闘争が巨大なブルジョア権力と国家の壁の前で少なからぬ闘争の停滞と動揺を生み出す時に、常に装いを新たにしたがら浮上して行くのである。しかも、一層悪い事に、この日和見主義潮流は、その出現の客観的根拠と歴史的法則を持つているが故に、いくつかの固定した政治性を潮流として維持し、常なる階級闘争に対する右からの働きかけ、プロレタリアートの中に存在するブルジョアイデオロギーに直接的関連性を政治的思想的に有している事にある。

回はとりあえず確認をしておきたいと思う。

さて、この間の党派闘争の展開軸が一体何であるのかという点について各グループの中にはなほだしい混乱が存在している。ある者は「武装闘争」の問題であると言ひ、ある者は「ソ連、中国の評価」の問題であると言ひ、またある者は「非合法党」の問題であると主張をしている。しかしこれ程こついで、これ程自分達の「知的水準の低さ」を証明しているものはいない。一体何時から革命を巡る問題の中で、革命のあり方進め方を中心課題とする論議以外が、古今東西の歴史の中であったであらうか。そんな事ははずもなかつたし、またあるべきではなかった。戦後の問題や情勢分析の問題や組織の問題が、だんだんそれだけをあれやこれや論議するだけで、各グループのグループわけができてしまつておろかな事は無いし、もしそうであるなら、この地球上には無限に近い、総人口に近い「党派」と称する左翼グループが誕生するであろう。いやそれに近い状況がすでにこの日本では起こっている。だからこそ無意味な分裂を「修復」する為の再度の無意味な野合が、その反動として進められようとしているのだ。(プント各派と毛派の大連合構想を思い起こしていただきたい。)

革命を巡る論争の最大のそして唯一の観点は、革命そのものの性格とあり方とその進め方の問題であり、社会主義革命か民主主義革命かであり、プロレタリア独裁か人民独裁かであり、そして当面の目標とその為の路線である。党が非合法中央集権党でなければならぬし、革命運動が暴力を抜きに武装闘争を抜きに革命軍亦革命の存在を抜きにあり得ない事や、あるいはその闘いは、ある日ある時かに権力闘争の時代に入らなければならない、階級闘争それ自身が常に権力闘争の時代―権力闘争でしかなくかつた、階級闘争それ自身とも共産主義者ならばあまりにも当然すぎる常識の中の常識ではないか。かの高名な先生方は、この常識の一部分を古いレーニン全集の中から発見し、その一行の文句を金科玉条のようにふりかざして「新党」の表カンバンに書き入れている。

我々は、この傾向と日常不断に闘争しなければならぬ。それはある一時期その部分を除去し抜く事ができたとしても(それはほとんど不可能に近いが)ブルジョア体制という土壌がある限りまた必ずその芽を出してくるからであり、ブルジョアなきブルジョア社会に於いても同じである。それが將に姿を変えたブルジョアイデオロギー以外の何ものでもないからである。

かつて我々は階級闘争の急進化はその結論に自然発生性の民主主義派の当然の結路として組合主義とテロリズムを生み出すと主張した。いづれにしても経済主義―ブルジョア補充物でしかなくとも規定した。その自然発生性は時と状況に応じて右にも揺れるし左にも揺れるが、しかしその闘いは何の革命的有効性をも残さない、と。今日のこの日和見主義傾向は、將に純然たる労働組合主義―大衆運動主義として左翼グループに実に色濃い影響を与えている。ある面ではこの傾向から自由になり得ている左翼グループは極少数である事を確認せざるを得ない。共産主義運動と組織の、ブルジョアイデオロギーと運動の自然発生性への拜跪と屈服が、あるがままの大衆への迎合が、この傾向によって司られているのである。

共産主義運動と共産主義はその歴史の中で、なによりも堅忍不拔の共産主義組織と共産主義前衛すなわち共産主義党を創り出す事をその第一の階級闘争上の任務として繰り返して提唱しその為の闘いを続けてきた。これはただ単純に組織闘争上の問題から「前衛」の必要性を主張してきたのは決してない。マルクスやレーニンの闘いとその主張を今一度思い起こしていただきたい。我々が真に大衆的たらんと欲するならば、それはまず何よりも共産主義者としての目的意識性を闘い取る事を要求されるのであり、その事を通じてのみ、ただその事だけが自己を真的階級としてのプロレタリアートたらしめ得るのである。そしてその結果は將に党であり黨員としての結果である。引用はあまり好まないが、あえてレーニンをして語らせよう。「党は、階級の自覚した、先進的な層であり、その前衛である。この前衛の力は、その数の十倍、百倍、それ以上も大きい。こうい

う事が可能であろうか？ 百の力は千の力をこえる事ができるであろうか？ 百が組織されるときは、こえる事ができるし、またこえていくのである。組織は力を十倍にする。この真理は、決して新しいものではない。：：とところで先進黨隊の意識性は、まさにこの部隊が自分自身を組織する能力を持っている点に現われる。そして先進黨隊は、みずからを組織する事によって、統一された意志をもつようになる。先進的な人々の千人、万人、十万人、百万人のこの統一された意志は、階級の意志となる。『ヴェ・ザスリーチ』はどのようにして解党主義を拒るか？「傍点はレーニン」先進的な人々の千人、万人、十万人、百万人のこの統一された意志は、階級の意志となる。この事こそが、共産主義運動と党の基本的核心である『なにをなすべきか』や『一歩前進、二歩後退』をここであらためて引用する必要もないであろう。そこには、あるがままの即自的プロレタリアートの意識すなわちブルジョアイデオロギーに拝跪する諸傾向に対する徹底的な批判が展開されており、そしてそこからのみ、共産主義運動と党の必要性が提起されている。そして、それは不可避にプロレタリア独裁の歴史的根拠として発展させられている。

あるがままのプロレタリアートの意識はブルジョア体制—資本主義の土壌の中で削り出されたものでしかないが故に、その自然発生性は、自己を階級として形成するいわば自的プロレタリア階級意識とはほど遠いものであり、そこからは決してプロレタリア階級性を生み出しはしないし、また生み出してはこなかった。それはせいぜいのところ、自己の即自的個別的利害の欲求でありその欲望の充足のためのイデオロギーであり、それは資本主義の生産関係が生み出すところのそれに適応した意識でしかなく、いわゆる協同組合か同業者連合という「労働組合主義の意識」以上のものでもなかった。それ以外のものはその自然発生性に於いては生み出さなかつたし、生み出さない。それは、労働力商品としての自己を生産関係の中で固定化し、自己の労働力商品の価値をいかにつりあげ、いかに高く

表層化された矛盾こそが、逆にプロレタリアート内部に個別的競争と分断の意識を削り出すのであり、階級としての自己ではなく個別的自己の定立化と他者との比較、すなわち競争と排斥の論理を生み出し、それが競争—延命の論理として資本主義そのものを維持し発展させる基盤を結果するからである。交換関係をのみ巡る闘いは、こうして容易に資本主義の防衛と発展の論理に結びつくし、階級分断とプロレタリアートの利益者集団化、そして個人への分化分散化を呼び起こす。これが資本主義の競争の根拠である。ここでこの闘いは、「一日の正当な労働に対する、一日の正当な賃金の要求」の闘いだけで、資本主義そのものをなにもつおびやかす事はなく、それを維持させるだけであり、ブルジョアイデオロギーそのものなのである。

その闘いは、他方で生産関係そのものが生み出すプロレタリアートの生産を通じての結合と階級としての密着性、共同労働と労働の社会化そして大規模生産の産み出す労働の均質化—共同化、この「組織された労働者産業軍」というプロレタリア階級性とその意識の萌芽を、交換過程という場でメタメタに切り裂いてしまうのである。いわば、生産の団結が消費の分断に負けてしまうのである。そして資本主義はその延命を唯一この現場で保とうとするのである。

資本主義に対する賃金に対する個別的叛乱や、分散化した工場占拠が何故敗北せざるを得ないのか、それともただ単純に闘争に敗ける（たとえ譲歩を勝ち取っても）だけではないか、何らの階級的な意識化された組織と思想をも残し得ないのかという問いに対する答えは、すべてここにある。

交換過程という敵にとって与えて良く、資本主義の最後で最強の場たる戦線で、プロレタリアートは負けるのである。そこにしか戦場を見ないその事こそがすでに勝敗を決めているのである。

この場所プロレタリアートは本来の階級性を解体され、擬制化されたプロレタリア意識（すなわちブルジョアイデオロギー）に改造されるのである。

売りつけるかという点のみその主題を置いてしまうのであり、また他方ではその労働力商品としての自己の物象化されていく事への社会的疎外を労働力商品として止場として、直接的な資本主義生産関係の廃絶を方向化するのではなく、その存在するあるがままの労働力商品の交換過程上の表現形態に対する感性的充足を求め、その交換過程のより人間的な「交換方法」を求めらるだけ、将に本質的矛盾としての直接的生産関係すなわち資本主義に対する闘いを頭から放棄するか、それを闘い得ない、いわば「支配の民主化」を要求する意識以外はない。交換過程の矛盾すなわち搾取や抑圧や差別あるいは自己疎外は、しよせん資本主義の目に見え場所のそれではないか、我々にとってそれが交換過程の矛盾としてしか直接的には理解し得ないが故に、ここにこそ、実に膨大な経済主義—日和見主義の発生する根拠があり、ブルジョアイデオロギーの残存—発生する根拠がある。その全ては資本主義の本来の核心—直接的生産関係に根ざしている。あるがままの直視的な自然発生的な即自的意識では、この事を理解することは出来なかつたし、出来な

日共の、利潤の不平等分配—搾取に対する闘いを革命と階級闘争の根源に置く思想は、その典型的例を表現しており、それ以外の左翼グループの傾向もこの日共の「左翼」版IIプロスターリニズム以上を越え得てはいない。かつての「疎外からの解放」という論理もそうであり、今だにはなばなく百出している「労働者自主管理」や「根拠地」あるいは「ソヴェト建設」、そして「階級服務」の思想であるとか「血債」の思想「戦闘的労働運動の潮流建設」や「革命的労働者統一戦線の創出」「全人民の共闘の確立」等々の言葉だけが革命的なあれこれのスローガンを、結局は社共の左翼的補充物、民間の左翼反対派としての包摂化のそれ以上のものではないという、その左翼グループの現実的存在の全ての根拠をここに置かす。資本主義は、その矛盾を仮装した形で唯一交換過程の中に登場さす。登場するのではなく登場させるのである。なぜなら、そこで

この意識の体系化が労働組合主義—大衆運動主義であり、すなわちそれこそが経済主義なのである。

日共、協会、カクマルが、何故にその表現形態に於いて類似しているのか、その事の論証はこれらが全てあるがままのプロレタリアート（人民）に拝跪し、その自然発生性に自己の党を純化させ、しかもそれを擬制的目的意識性という観念主義的なイデオロギーで密教化してしまうところにある。彼らは交換過程の戦線での量的拡大以上は闘いの現場を持つ事はできない。そしてそこでの敵の強大さに恐怖する事で容易に自己を日和見主義の地獄へと陥らせていく。彼らには階級闘争が勝利するという理論的確信と信念を持ちあわずにはあまりにも臆病なのである。それは資本主義に対する、いやただ単に資本と資本家に対する即自的な反発、憤激、反抗の意識一般しか持ちあわせていないからである。それは被害者意識の集合でしかなく、恐怖と弱者の集団性の論理でしかなく、呪いと恨みの観念の体系化でしかなく、そこには資本主義そのものが社会主義を生み出し、プロレタリアートが抑圧され、それへの反抗を生み出すだけなく、資本主義の生産関係そのものがプロレタリアートをして資本主義を揚棄する唯一の階級として削り上げるのだという弁証法的唯物論を持ちあわず余地はみじんもない。

他の左翼グループもこの傾向からは自由ではない。第四インターナショナルや構改諸派としてブント系や毛派グループ、そして解放派すらもこの経済主義の魔の手からは逃がれる事はできていない。

単純なリトマス試験紙をひとつ差し上げよう。それぞれの労働組合や大衆戦線の中で、左翼グループの一員として闘っているの者と、その組織や他の左翼グループに加入していない一般的な活動家とを比べてみれば良い。彼がヘルメットをかぶるかその組織の機関紙を売る時以外に、彼を他の一般活動家と区別する一体何があるのかを。「党派」と大衆の区別が少なくともその労働現場—闘争現場で色別する事が可能かを。「黨員」になつた者とならなかつた者の決定的区別がその組織にあって、闘う労働現場に於いて存在するか否か

を。もしその左翼グループが、個々の組合の、せいぜい最も良く闘う先進部分にしかすぎなかったとしたら、それはその左翼グループとその「党員」の献身性一般を評価するだけにしかならない。「党派」が組合に解消され、職業革命家が労働組合活動家に解体されているのである。もし彼が「党派員」と機関紙販売と会議しかない組織であり、他の活動は全てその現場そのもの運動であるならば、その組織は死んだ組織であり、労働運動―大衆闘争にとり、ましてや階級闘争にとりても何の必要もない組織である。

そこには、党と階級、党組織と大衆組織のその連関性へのあまりの混乱があり、共産主義運動へのあまりの無理解がある。

党と共産主義者は、労働組合やその他の大衆組織という自然発生の運動に対して、その内部で自然発生の運動そのものを担い、資本主義に対する暴露の闘いとして、その闘いの発生の不可避性と、その根拠、そしてその自然発生の運動が直視的な即目的な形態―組合や闘争機関の利害を越えて、全階級の利害を求めて、自己が出生した資本主義そのものの廃絶に向う闘いと、その陣型の必要性と、それが唯一の終局的勝利の環である事を指し示す宣伝・煽動として組織化の闘いを闘い抜かなければならない。しかし、この目的意識的な闘いは自然発生の闘争と切り離しては闘い得ないし、その自然発生の運動こそが目的意識の闘いを、未来から現実、思想から実践にひきつける唯一の土壌であり、プロレタリアートの階級性を向自意識化する事で生み出され、そこに於て一旦はプロレタリアートの即自性から向上したその向自意識の階級性が、再び今度は生きた階級実践と運動としてプロレタリアートの中に舞い戻る事ができるのである。そしてそれは自然発生の運動の延長上に創られる運動とは、その思想と目的において全く異なる内実を獲得しているのである。

大衆の自然発生の性こそは目的意識性の萌芽なのであり、意識化されたプロレタリア階級性すなわち共産主義(科学的な社会主義)イデオロギーは、階級のその外から注ぎ込まれなければならない。この二

尚一層の小ブル性(ブルジョア性)を開花させている事を歴史は闘いの中で証明するであろう。

それは決して「党」でも「共産主義」でもなかったという事。そして我々は、党により一層大胆に大衆をプロレタリアートを結集させ、共産主義を自然発生の内部で育て抜いて行くであろう。将に一個の「権力」として。

二、毛派屈服とスターリン主義への昇天  
アント系諸派のこの間の状況について、少し述べさせていだきたい。

七〇年代の階級闘争の中で、構改諸派と並んでその担うべき課題に対してただただ自己の混乱と際限のない分裂をくり返してきたのがこのアント系諸派である。

しかも尚一層悪い事に、このアント系諸派の場合、少なくともかつての第一次アント・第二次アントの有していた党と路線の主体的立場を、今日のはとんどのグループが見事に捨象し、事大主義的に勝利した革命―団に「依拠」してしまうか、かつての日共の路線の地平へと「先祖帰り」してしまっているかのどちらかの傾向がそのほとんどを占めている事である。そしてそれらの全てが、その主要な傾向に於いては、経済主義―解党主義に陥っている事がある。もとよりそれが意識的であったなどは言わない。それぞれが情況と対面し自己の闘いのアントの総括をかけてやり抜かんとしてきた事の姿勢と熱意は重々理解はする。しかし将来に地獄への道は善悪でしきつめられていたのである。彼らが結局は第一次アントから第二次アントへと至るその流れの核心を理解し得ぬまま、それに対する一般的な「党建設」や「綱領」あるいは「労働者サークル」を『小ブル主義の克服』として、それぞれの気持ちを「納得」させ合理化させてしまったところに、日和見主義への「沼地」への解体、その全ての源根がある。

たとえて言う。アントの最も純粋化した形態の帰結は今日の姿

つの命題は何ら矛盾しない。我が経済主義者達はこの両者の区別と連関が何ひとつ判っていないのである。

プロレタリア階級の意識性を意識性として有し得ない彼らは、不可避的にプロレタリアート人民のあるがままの即自性に拜跪し、そこに自己を定着させ、そこに一切を解消させ、プロレタリアートの闘いが狭い個別的な範囲を越えその意味でブルジョアイデオロギーの最後の鎖を断ち切り、階級の全体性と闘争の究極的勝利に向かうとする事を、彼ら自身の疎外性でもっておし留めようとするのである。

彼らが「大衆の利益を第一にする」「大衆に依拠して」か「人民の闘いが全て」とかを唱えれば唱える程、大衆を低い意識に押し留めその発展を疎外し、そうする事によって真の大衆から意識した大衆からますます離れていってしまうのである。彼らからは、資本主義のもとでの即自的な大衆の形象態が擬制的であり、その擬制性に大衆自身が様々な現象を通して端的ではあれ気付けていく事を何ら理解していないのである。

「労働者の気持ちに判らなかつた」「人民の一人として」「組合闘争に深く根ざして」等々のあふれる「迎合と拜跪」の思想、その小ブル諸派―左翼グループと「党員」の皆さん、それならばどうか一日も早く「大衆の中に」お入りなさい。御自分を一人の労働者として完成なさい。組織をそれに見合った「労働者サークル」として精密化なさい。そうする事によってあなた達は、共産主義と共産主義運動の厳格さと闘いの困難さから、自己をきれいさっぱりと洗い流す事ができるのだから。ブルジョアイデオロギーと非プロレタリア階級性の中で。

そしてその様なきれいな文句は、あなたが共産主義者ではあり得ないと言ふ事にはじめて大衆によって受け入れられるのだから。我々もまたあなた達を「大衆の一人」として尊重してあげよう。

今日の小ブル諸派が、大衆の中に入れば入る程その事によって

にあつて、日本赤軍と三上治とそして我々にある、と。

大衆運動主義上の急進主義の徹底化とその同質性としての人民主義、それが日本赤軍の運動的核心のひとつである。そして同じく大衆運動主義を個の自立―運動の自律のベクトルと情念の領域で徹底化させたのが旧派旗派であり思想上の問題に純化させてしまったのが三上治である。かつての関西プロと独立社学同のそれだけの帰結と、その連合体でしかなかったところのマル戦派離脱以降の第二次アントの組織的な結論である。その大衆運動主義と急進主義の運動徹底化に、小ブルインテリゲンチヤアの組織から、共産主義者の前衛へと自己を戦い取らんとした第二次アント。我々はこの第二次アントの苦闘にただ単純な『小ブル主義の限界』をのみ見るわけにはいかない。「プロレタリアート」ではなかった、だからプロレタリアートに依拠する党と思想を獲得しよう、しおらしげに総括する事は、第一にアントがあくまで党建設の運動として大衆運動の生きた現場にその活路を見出ださんとした事を捨象し、第二にその種の「総括」が結局はあがままのブルジョアに拜跪してしまふ解党主義へと陥っていく事、そして第三にそこからの「党の要求」の地平が不断のソコラ主義(革共同主義)と細胞主義(スターリン主義)へと昇天していく事、この事に於いて実に反動的であると言わざるを得ない。

我々はこの地平とは異質なところからアントを対象化する闘いを理論的にも実践的にも展開して来た。

我々は党内にあつてただ一度も急進主義や個人の情念主義を「克服し得た」とは言っていない。それはなによりも、我々自身が六六年のアント再建を担い、六七年一〇・八を闘い、六八年のR・O建設とそして赤軍派という第二次アントの結晶を、その肉体で、その全体で、闘い抜いてきたからに他ならない。

闘いを放棄し逃亡してきた者は、その「言葉」上の総括が実に安易にせるといふ見本が、これらの「アント総括」である。

我々は急進主義―情念主義が、戦後日本の階級闘争の歴史の中で、

とりわけ五〇年日共の「解体」過程以降の、日本に於ける組織化されない大衆の自然発生的な胎動と、そこから出発をなさんとしてきた若き共産主義者達の最も純粋な姿であったし、それでしかあり得なかつたという事を知っている。その中でしかし確実に、新たな共産主義の前進を獲得せんとするいぶきは脈々と流れていたたのである、その為にかつてに無数の、そして無名の同志達が血を流してきたのだという事を我々自身の時間の中で確認をしている。学生という小ブルインテリゲンチヤから共産主義者たらんと闘いを続けてきた者を、「小ブルであった」などともないも当然の事を主張する事で「総括」しきれぬなどとはとんでもない事ではないのか。そうならば、かつての学生が今日ではなんらかのそれだけの労働現場を有しているのだから、自然発生的にかつての「小ブル組織」が「プロレタリア組織」になっていくという事になる。その逆の学生階層が現代の高度化された資本主義のもとでは膨大なプロレタリア予備軍にすぎず、学生はもはや小ブルではない、と意味付与する事も同質である。小ブルからの時間的延長の平面上にプロレタリアートを指定し、その即自的なプロレタリアートの存在形態を全面營養する事で、その中に埋没しきろうとする。これこそ悪しき「ナロードニキ」の現代版以外のなにものでもないではないか。

小ブルインテリゲンチヤが、たとえ最初直感—観念の領域であり、自己の置かれた階級の立場とプロレタリアートの階級の本質を、イデオロギーとして論理化する事、そこから資本主義を批判—対象化しつつ、共産主義(科学的社会主義)を理論的營為と闘争の実践の中で獲得しようとした事、この事は共産主義運動のその端初としての当然の姿ではないのか。しかもその闘いが、日本にあつて(もとより他の先進国も同質の経緯をもつ)解体し腐敗し帝国主義の側に身を寄せたエセ前衛共産党を乗り越えて、大衆闘争自身を闘いとして正面からの帝国主義との対決を、將に指導部—前衛の不在の中で徹底して闘い抜いてきた事、この闘いの支柱として闘争を組織化し領導し抜いてきたこの若き共産主義者達の闘いは二重三重の意味で

共産党の動揺にあわせて、方針と情勢分析のブレを続けさせている。また、党建設の路線の核心たる中央集権主義(プロ独主義)と職業革命家の党(共産主義者への止揚)の内実を獲得し得ない彼らは、装いを新たに「依拠路線」とも言える細胞建設を通じた労働組合への党の解体—純化を進めつつ、そこからの情勢に左右される気分の動揺は何の党的基軸もないまま、大衆闘争の流動に政策阻止闘争としての投入を、民主主義運動そのものへの自己解消を、その気分としての大衆闘争への参加の中途半端性としての大衆運動主義へと自己が転落する事を防ぎきれていない。

そしてそれらは、彼らがやはり単なる理念主義でしかない事を、たとえ理論的なものでしなく何の階級実践をも内包し得ない『綱領草案』という膨大な作文を、やはり自己の組織的闘争と何の関連性をも有し得ないところで理解(そう単なる理解だ)するとうい、運動そのものの中でそれを路線化する事ができないという、綱領と戦術、思想と実践の遊離を更に激しいものとする事で、彼ら自身のその『綱領』の敗北—党の解体を招来せしめている。プロント系諸派の全てが、これらの決定的限界性のそのいづれかを表現させている。その事こそが、その止揚こそが、唯一正しく、プロントを対象化—総括し、それを継承する事で揚棄—発展させてゆく道であるにもかかわらず、彼らはそれを放棄したところで、プロントの栄光性に自己の延命を模索する。それは將に政治的腐敗以外のなにものでもないではないか。

要約しよう。彼らの決定的誤謬は以下である。第一に、組織論に於ける細胞建設主義への党建設の一面化。そこからの大衆の自然発生性への拜跪と溶解。必然的なサークル主義—解党主義。そしてつまるどころ労働組合主義。見よ！ 全てのプロント系の諸君の、労働者と労働組合についての、あの執ようなまでの固執と、それへのお説経を。プロレタリアート人民の一般的な悲劇性—呻吟・苦悩・憤激をありとあらゆる言葉で語っている、あの膨大な機関紙類の束を。そしてそこからは、ただ、一般的な反抗や抵

圧倒的な高地を戦取してきたのだ。

共産主義者の闘い、その党の建設、その闘いをあくまでも大衆運動のダイナミズムの中で勝ち取らんとした闘いは、そうであるが故に、決して否定されるべきものではなく、將に新しき真の共産主義前衛創造の為のその黎明期としての輝かしき歴史の評価を与えらるべきものなのである。第一次プロント—第二次プロントの二度のこの為の壮大な試みは、その質的發展の中で、今日ようやく「新左翼二十年」の苦闘を経て、あらたなる共産主義運動と党の胎動を造りあげることができたのである。そこにこそ、この二つのプロントの総括の軸が置かれなければならないし、そしてまた二度目は許されても、その誤りも三度目は許されないものである。プロントの闘いは、共産主義前衛としての闘いから、大衆の一般の闘争のその地平へと解消させ、否定しきる事ではなんの解決にもならない。

そして、このプロントを一般的な大衆運動の局面でのみ総括し、そこからの当然の帰結である「党建設の必要性」を、あたりまえの、しかも無内容な論理地平でもって「第三次プロントの建設」を語らんとしてきたのが、七〇年代のこの数年間のプロント系諸派の実態なのである。それは自己の増々のプロレタリアートの自然発生性への拜跪しか獲得しえない。

今日のプロント系諸派の基本的特徴は、第一に毛沢東思想への屈服から中国共産党への一面的迎合であり、第二に労働者サークル主義を通しての組合主義への埋没であり、第三に観念主義と大衆運動主義の純化としての『綱領』と戦術の遊離と路線の欠落である。

民族解放闘争の昂揚と發展の情勢に規定された、いわば過渡期世界の高次の自然発生性への驚き「第三世界革命論」—中国革命への「再発見」へとその視点の動かし、「第三世界論」への共感中国共産党の「世界の三極構造論」への屈服となり、遂にはソ連社会帝国主義規定へと達着した。そしてそれは中国共産党の全面指示として党路線と国家外交の混乱をそのままの形で胎内化しつつ、「本家」—中国

抗の必然性が、あたかもプロレタリアート人民の唯一の闘いの方向性であるかの如く描かれていたその煽動のスタイルを。しかも、それに党建設を結びつけんが為の「労働者の中へ」という方針の、しかも尤もらしい弁明を。下からの党建設の追認のぶざまさを。

第二に、戦術的無定型性とブレ。権力打倒—権力奪取とプロ独へ向けての計画された戦術、一貫した闘争展開の核心の欠如。それはつまりは党の戦術の否定として、共産主義者の任務を曖昧なものにする。そしてその戦術的結論は、政治闘争—権力闘争の基軸である革命の為の権力行使、革命戦争とその前衛部隊(革命軍—赤軍)を戦取してゆく事の放棄と、非合法党建設への言葉としては別であつても内実での否定へと行き着いている。いかなる情勢の中でも、大衆が昂揚期であろうと停滞期であろうと、その中で、どの様な任務をも展開をなす事のできる堅忍不拔の党の存在、そこからの計画された戦術の展開。それは、あくまでも非合法地平からのみ出発しうるものであり、非公然活動だけが、ただそれだけが、真の広範な公然活動を保障するのであり、大衆運動を系統化された政治闘争へと結び付ける事ができるのであり、そこからのみ、核心の堅固さのみが、戦術の計画性、すなわちプロ独—共産主義革命への水路とそれへの任務を鮮明にし得るのである。

合法活動の計画化、統制化から非合法活動の開拓へ。機関紙を軸とした宣伝の闘いの充実から、軍事闘争と軍事を組織する。大衆闘争の武装化から軍を組織する。：：：語り尽されている今日のこれらのプロント系諸派の諸君の空文証明に他ならぬ日利見主義と合法主義とそして党建設否定の膨大な証明に他ならぬレーニンを見よ！我々はただそれだけをおも彼らには進言しよう。

今は軍は割れない。戦争を闘うには弱すぎる。そう正直に語るのならばまだしも救いはある。そう、軍事と党建設はそれ程なまやさしいものではないという事を我々自身が知っているからだ。だがその自分達の困難さを、大衆に押し付ける事は、すでに自己の腐敗の表現なのだ。その事をまず理解してくれたまえ。大衆は闘いたい

だ。革命をやりたいのだ。国家に対する暴力行使を、権力を打倒する事を、そしてプロレタリアートの権力を打ち建てて事を望んでいるのだ。ただし「勝てる」革命としてののみ。

我々は、その勝利の確信を、陣型を、戦闘方向を、そして目標を、全てのプロレタリアートの前に、ただ言葉だけではなく、我々自身の日々の闘い、実践、組織化を通じて指し示さねばならない。それが共産主義者の任務だ。

そしてその事が、非合法党とは中央集権主義の権力的表現なのであり(党とブルジョアジーの二重権力)、それはプロレタリア独裁の今日の保障であり、従ってそれは単なる非公然性と同義なわけではなく、それ故、それ故、非合法党の建設は、非合法権力とその運動の中でのみ唯一可能である事を前提とするだろう。

また、権力闘争としての政治闘争を闘う基幹部隊たる革命軍が、単なる文章や大衆運動の中からのみでは決して建設し得ず、将に戦争と戦争の中でのみその戦争を担う部隊の創出がある事、もとよりそれがただ戦闘のみを意味せず、非公然軍事の全領域の獲得として、階級間戦争の基本構造を日常化する事に於いてのみ可能という事を、その闘いの実践の中で将に鮮明にしてゆくであろう。

そしてまた、宣伝や煽動が、その組織の具体的活動と結び付かず、プロ独―共産主義革命へ向けての戦術の実践と離反してしまい、情勢分析や資本主義への批判に留まっている多くの諸君の今日の姿は、決してレーニンの主張した『煽動』の意味を理解し得ないだろうし、それが組織化と一体となった具体的闘争の意味である事を放棄したまま、ただの「広告紙」へと自己を低め、それが何の党の建設へも結び付かない事を指摘しつつ、計画された戦術、非合法党の組織的活動とそこから大衆指導、戦争態勢と戦闘を通じて闘い、その先頭の首尾一貫性のみが、真に組織の全体性、系統性、そして堅忍性を保障し、そのみが「全国政治新聞」をレーニンの言う「組織者」としての任につかせうるのだという事を確認しておかなければならない。

君達は、帝国主義戦争が開始されている時に、いずれかの帝国主義に加盟しようというのか。そんな子供じみた共産主義者であるなどとは言わないでくれたまえ。

もう一度だけ言おう。レーニンをマルクスを、後生だからもう一度勉強し直してくれ。そして中途半端な読み方から「方針」を借りてくるのではなく、全てを客観的に見てから「党派」を創ってくれたまえ。

とにかく、今日のプロント系諸派はこの善意の道を踏みしめながら、ひたすら共産主義から離れて行っている。

第一に革命の問題、権力問題からの逃亡であり、  
第二に、過渡期世界の高次の自然発生性としての第三世界および中国、そして帝国内プロレタリアートへの全面押込であり、  
第三に、その路線的思想的表現は、一國主義Ⅱ一國革命路線への後退とスターリン主義への反動的回帰である。

プロント系にとっても、六九年はその進路の実に重要な分岐点であったということである。

三、急進民主主義の限界とその克服  
本稿の最後に、十年一日の如く、あいつも変わらない急進主義者としての本質について若干述べてみたい。彼らが永遠の急進主義者として、民主主義派の姿が変わらぬ形で維持されてきた事についてである。その愛すべき民主主義派の献身的諸君達に対しては、我々はすでに幾度も大きく表明してきたように、諸派―左翼グループに対して、あくまでも大衆戦線のひとつとして、支持し、翼力し、共産主義運動へと結合させる事を援助してゆく事を基本としている。そう、彼らは、愛すべき大衆であり、民主主義派であり、批判すべき対象ではないのだ。その最たる諸君が、この変わらぬ急進主義者の諸君なのである。

プロント系の一部のグループを除いて、この急進主義派の傾向はその闘争形態に於いて、二つの傾向に向かいつつある。

最後に、彼らの限界を再度指摘するならば、第三に、彼らの闘いが、何の革命路線をも路線として獲得し得ていない事であり、いかにしてプロ独を樹立してゆくのか、このプロ独―共産主義革命へと結合させてゆくのか。今日のその為の当面する任務は何であり、それは情勢の何に規定されているのか、そしてその闘いをどう拡げてゆくのか、その結論は一体何であるのか。これらの事に對して、実に何の一言も語り得ていない事にある。

彼らは「危機」を叫ぶ。「戦争と革命」の時代―天下大動乱の時だと言う。朝鮮戦争が始まると言う。ソ連と中国(米國)の開戦が近いと言う。

それが一体何だと言うのだ。資本主義が資本主義である限り、それは不可避に彼自身の崩壊の「危機」を日々増幅させているわけであり、帝国主義がその物質的土台に於いて社会主義の前夜を国独自体制として、より強化しているのであり、そして帝国主義自身の不可避の危機が、帝国主義間戦争―市場分割戦―植民地支配の戦争の不可避性を明らかにしている事、そして他方で帝国主義の自己矛盾が世界プロレタリアートをして増々次の時代の唯一の階級として位置を確固たるものとし、その階級の増大が加速化されている事。そんな事はあたりまえの事であり、たとえ意識化はできずとも、そんな事は大衆自身が直感的ではあれ理解しているのだ。

朝鮮戦争になるかもしれない。中ソ開戦となるかもしれない。だが、果して共産主義者とはその様な帝国主義の動向に合わせて自己の闘いを変化させてゆくものなのか。

共産主義者の闘いとは、戦術的には「帝国主義間戦争を内乱へ!」―「民族解放闘争と結合し自国帝国主義を打倒せよ!」であり、「祖国の革命的敗北を!」ではないのか。路線的には、帝国主義の打倒―プロ独樹立であり、資本主義の究絶と社会主義建設の共産主義革命に全ゆるプロレタリアート人民を結集させる事ではないのか。それが基軸ではないのか。

ひとつは民主主義軍事派であり、ひとつは労働組合活動家派である。いわば前者がテロリズムへの道を進みつつあるなら、後者は組合運動主義への道を進みつつある。

もとよりその政治的土壌は共通している。経済主義であり、大衆運動主義であり、戦線―サークル主義であり、そしてやはり、つまるところは民主主義派であり急進主義である。

中核派、解放派を典型的に急進主義上の軍事への志向は、「強制された」曲折した形での「戦争」を通して拡大されつつある。それに對して「戦争」を直視化できず、反革命との闘争もそれと同質である事を規定できない部分は、「内ゲバ反対」「人民の中へ」という構造の中で、社共の左足たる事を、労働組合主義者として選びつつある。第四インター・構改派・プロント系、そして毛派のほとんどがそうである。

運動での急進主義は、その運動の推移をただ単純なる戦術的展開としてしか自己のものになし得ない。それが民主主義派の本質を規定してしまふ。運動の停滞期には組織戦術であり、昂揚期には急進的戦術である。彼らは常に大衆の気分からのがれる事ができない。その気分の自然発生性を自己の戦術へと転化する事で、その政治力を保持しようと努める。

従って、その帰結は、組織戦術―運動の停滞期に於ける「量の拡大」という、平面的な大衆獲得の為の闘争であり、急進的戦術―昂揚期に於ける「戦闘の高度化」という、単なる武器のエスカレート、戦闘の衝激性の拡大という闘争である。大衆運動の中で政治的延命をなし得ない彼らが、常に自己の闘争を大衆という鏡を通じて確認する事を意識するその表現である。

しかし、それは共産主義運動の論理でもなければ大衆運動の論理でもない。大衆運動の利用主義以外のなものでもない。

共産主義運動には共産主義運動の一貫した論理があり、また大衆運動には大衆運動それ自身の否定し難い論理がある。前者を後者に一面化できないのと同時に、大衆運動をそれ自身の全てを共産主義

運動に代行させてしまふ事はできない。それは両者の死を意味する。問題なのは、大衆運動としてのプロレタリアート人民の自然発生的な反帝闘争―民主主義闘争を、その闘争の独自のな自己自身の、そして自発的な闘争の展開と著績を通して、その闘争の内部で、真の解決の道たる政治闘争―共産主義運動への水路を創る事にある。何度も確認してきた、自然発生性と目的意識性の連関の問題である。この両者の区別と連関、そしてその結合環としての共産主義者―党の任務を理解し得ない事によって、実に大衆運動そのものの発展の疎外物へと急進主義者―左翼グループの腐敗化のはじまる環が存在する。

大衆運動の自然発生性に、我々は決して「量的拡大」や「戦闘の高度化」を、それのみを取り出して要求する事もできないければ、またそれを指導と称して押し付ける事もできない。

大衆運動それ自身の闘いは、大衆自身が決めるものであり、それが民主主義的闘争の範囲内に留まっているならば、その大衆闘争の論理と民主主義運動としての闘い方を、やはりそれ自身として否定し捨てるのではなく、その運動そのものを尊重してゆかなければならぬのではないか。共産主義運動―政治闘争へと止揚する為にもである。

ましてや、その大衆運動を戦術的急進性でもって、いわば闘争形態の高度化・戦闘化でもって、あるいは単なる量的拡大のみでもって、大衆運動を発展させたものであるなどという考えは、まったく度し難い反動的見地だと言わざるを得ない。

今ここで、ひとつの思いを述べる事を許していただきたい。かつて我々は、いわゆる「街頭主義」という急進主義運動の最先頭を走っていた。闘争の度の戦術的エスカレーターを、最初は「ゲバ樺」から「火炎ビン」そして「爆弾・銃」という、武器それ自体を「持つか、持たないのか」という面でのみ、その闘争への参加・不参加をせまってきた時期があった。将に、戦術の自然発生性に拜跪する事で、戦術の高度化それ自体が政治闘争―権力闘争への飛躍で

あると信じた時期があった。しかしそうではなかった事は何よりも我々が、闘ったが故に、一番良く知っている。ただし、それでも、我々は常に闘ってきた。その隊列の先頭に立ち、突撃の歓声を常に自己の肉体で発してきた。武器を持った事は事実なのであり、それは決して間違ではない。より大胆に、より徹底的に、力としてその闘いを展開すべきであった。たとえ自然発生的な一面的な反帝闘争―民主主義闘争の範囲でしかなかったにせよ。

しかし、「より大胆に武器をとるべきであった」というその『武器』とは一体何であったのか。果して文字通りの、単純な軍事的なものとしての『武器』であったのだろうか。いや、そうではなかったはずだ。もちろん、単純な『武器』としての『武器』もそこには含まれていたであろうが、それが『武器』の全てでは決してないはずである。その様な『武器』ならば、いつでも造りうるし、闘いはより簡単であったはずである。

我々にとつての『武器』とは、将に思想性であり組織性であり、そしてもとより献身性であり、つまりは『武器』を持つ『人間』のその核心が、その第一の要素なのではないのか。その事を獲得してこそ、唯一『武器』が武器となるのではないのか。『武器』を手にして「戦争」へと突入して、今つくづくそう思うのであり、連合赤軍の敗北という尊い代償をその様にして我々は今払っているのである。六九年十一月闘争と、自己体験ではないのだが、六〇年六・一五闘争とを、その急進性の面で比較をしよう。

六九年の十一月、すでに我々は、爆弾を手にし、そのほとんどの街頭闘争の主要な武器はゲバ樺から火炎ビンへと移っていた。誰もが火炎ビンを投げつけていた時期である。しかし今思う。本当にあの火炎ビンを投げ突入していった事が、ただそれだけが本当の急進性―飛躍としての強さだったのか。大衆に火炎ビンを投げさせる事のみが我々の真の大衆路線であったのか。火炎ビンを投げ機動隊に突入しながら、しかし、大衆隊列の当然の事として、最後には逃げ出し、突撃を貫徹し得たのは、戦闘局面で言うならば、やはり機動隊

の方であった。連日のピラや機関紙での誇大な「突撃す！」という勇ましさと裏腹に、その部隊数の水増しと同じく、それを書く者も読む者も内心では信じていなくとも信じたいと願ってしまった、その闘い方が、真に我々の強さであったのだろうか。急進主義の頂点として、我々も含め多くの諸君が「玉碎」を覚悟し「留置署に全員入ればそれで勝利なのだ」という我々の信念と強さを、大衆闘争のそれとして示すべきであったのだとしたら、火炎ビンではなく、素手で、ただ黙々と「羽田」への道を、たとえなぐられればよく、ガスマスクやたて血を流そうと、いやたとえ殺されようと、倒れればその屍を乗り越えて最後まで前進する、闘いに参加した者の全員が貫徹する事の方が、大衆闘争上の武器と戦術の急進化よりも余程強いものではなかったのか。すでに現実の闘争には、確かに「膨大なゼロ」と我々もヤユしたが、あの六月―十月の十万にも及ぶ大衆のほとんどが、その武器と戦術の高度化・急進化のみには否定と不参加の態度を明確にしていた時に、その急進化は一体何をもたらしたのか。大衆闘争のそれ自身の論理と闘い方に、自己を疎外させる事を通じて、やはり無理解ではなかったのか。大衆闘争の真の強さを、たとえそれが一面的であったとしても、やはり自己の急進性でもって擧り去ったのではなからうか。

六〇年の六・一五闘争は、たとえ逮捕等の弾圧が比較する事ができないにしろ、ブント―全学連はその戦闘スタイルを、投石をする事でもなく、ましてや車に火を放つ事でもなく、ただただ「国会内

## 反帝国主義運動におけるプロレタリア的戦術について！

中央組織局

一、プロレタリア的戦術とは何か！

第一に攻勢戦術であり、第二にセンメンツ戦の軍事である。それは、革命的プロレタリアートの武装と武装蜂起の組織戦術であり、その

集会」という、ブルジョア民主主義の範囲での当然の合法的なそれとしての方針を持ち、全学連幹部は、部の投石を始める者等に対する徹底した統制をその第一の任務とし、機動隊からの投石とコン棒の中で全員が血を流しながら、「当然の権利」としての「国会内集会」をのみ勝ち取らんとしたという。なぐられ傷つき血を流す事を重々承知したうえで、しかし尚も大衆闘争の武器の高度化や闘争形態の急進性にその発展があるなどとは主張はしなかった。

もとより時代の違いはある。我々自身が安保―日韓世代を「日和見主義」として批判しながら闘いを開始したのも事実である。しかし、大衆闘争の有さねばならない基軸はその強さは、はたしてどちらにあったのだろうか。武器と戦闘の急進化の六九年にあったのであろうか。党の戦術としてではなく、大衆闘争のそれとして、である。大衆闘争の自然発生性に、ただ単純に闘争戦術の急進性を、それまでの大衆獲得主義の裏返しとして登場させる事が、今日に於いてもまだ統一しているように思える。それは、少なくとも前衝を自認する者にとつては、やはり大衆利用主義としての自己の腐敗に通じるのだという事を、もう一度指摘をしておきたかったのである。

急進主義を大衆運動それ自身の自然発生性としては、重々に評価しつつも、しかし、それが、「党派」―左翼グループのそれなりの路線として存在してしまっている事を、我々は批判をなしておきたかったのである。

組織された武装プロレタリアートの階級的力に立脚した臨時革命政府樹立のスローガンである。我々が今日、このレーニンが提起し、ロシア革命が歴史的に立証した階級的戦術―スローガンを復権し、

実践的に継承する緊要の任務に当面するのは、この戦線における大衆運動主義と経済主義の日和見主義の蔓延に抗して、武装闘争を、その戦争の展開を軸としたプロレタリア社会主義革命の大道を描き清めるためである。

「建党建軍」、「階級依拠」、「階級服務思想」、「人民：」云々、日和見主義者の常套的な空文句の一例である。彼らの用語上の主要な特徴は、その自省的な、内向的な、主観主義的な（連赤総括の敗北主義的な後遺症であるが）総じて観念的—スコラの傾向にある。彼らが如何に手工業的に、サークル主義的に、あるいは（これが最も適切な表現だが）思想集団的に武装（革命的プロレタリアートの）着手を、軍事技術の問題を昇天させるかを指摘する事は、このプロレタリアの戦術を際立たせる一点において意義がある。党の軍事、党の軍隊を語る事、党の非公然体制と秘密活動を語る事（もちろん語るだけであるが）、そしてその彼岸に、人民の武装闘争と蜂起を抽象する事、彼らが無邪気に熱中する戦略ゲームの概観はほぼこうしたものである。（プロ独は修飾辞として多用される）彼らは内向け（すなわちサークル的な、密教的な）の言葉は豊富であるが、決起したプロレタリア人民に語る言葉を持たない。彼らは、帝国主義的な政策に反対する労働者、住民の運動や、そのスローガンに支持を与え、時には現場へも出張するが、それだけで十分だろうか。もちろん、彼らはこの登壇に際しては党派軍団—ヘルメット部隊として、デモンストレーションや市街戦を演出するが、それで十分だろうか。三里塚の革命的な農民は、十年も前からこのような武闘に習熟しているし、日本原で、北富士で、砂川で、決起した住民は、具体的な、実戦的な、階級的な軍事とその機構を敵軍隊から学んでいる。全国被差別部落人民は、司法権力と地域政治の力で対決している。これらに戦闘的な、革命的な被抑圧人民—プロレタリアートの隊列に合流する（色分け別働隊として）その地中で、彼らの闘って見せる宣伝—煽動戦は完結する。決起した人民が、彼らから学んだことは何もない。彼らは、いつまでたっても便利な支援部隊である。彼らは、未来か

ら来た階級軍隊ではなく、過去を引きずってきた傭兵である。この間、これら決起した人民が、社会主義的変革についての宣伝の洗礼を受けた事があつたらうか？ 具体的な武装と、実践的な攻勢の煽動を受けた事があつたらうか？ 武装蜂起と、それに立脚したプロレタリア独裁の機関—臨時革命政府樹立のスローガンに逢着した事はあつたらうか？ 全般的な武装蜂起と臨時政府樹立の政治課題をスローガン化する客観的条件（プロレタリアートの階級意識は、党にとっても主観的条件である）が煮つまっていないならば、そのようなスローガンが時宜を得たものでないならば、我々のこの任務は、より一層の精力的な取り組みを要請される。それは、「過程としての戦術」や「過程としての蜂起」派の自然発生性への拝跪を凌駕するより一層の階級的—意識的—合目的の戦術の貫徹としてである。この段階（全般的な、決定的な蜂起は日程にのぼっていないが、世界の至る所で、小規模な、連続的な蜂起と、市街戦、デモンストレーション、政治ストが頻発し、世界的な階級決戦の機が熟している。）における日和見主義者の戦術に選択の幅はない。「武装蜂起のための社会的心理的条件を整備する予備段階としての戦術」、これがメンシェビキ以来の現在を凍結する（永遠の今）として、つまりは小ブル民主主義派の伝統的戦術である。そしてその一翼に、党の武装、党の軍隊を語り、革命的プロレタリアートの武装を、革命軍—臨時革命政府樹立の組織化を等閑視する潮流が派生する。このグループは、決起した革命的な人民を社会主義の水準へ引き上げるのではなく、権力（プロ独）へ近づけるのではなく、党と大衆の間に万里の長城を築き、結局はブルジョアジーに売り渡すのである。

## 二、民主主義闘争とは何か？

民主主義闘争の今日的な発現形態が、反帝国主義闘争である事に留意しなければならぬ。産業資本主義—自由主義段階から、その最高の特異な段階、国独資本主義—自由主義段階において、民主主義は、その経済的基盤の発展段階（客観条件）に規定されて、様々の歴史的インパクトを交錯している。民主主義闘争の第一段階は、ブルジョア革命としての民主主義的変革の時代である。この時代は、『ロシアのような国では、労働者階級は、資本主義のために苦しんでいるというよりも、むしろ資本主義の発展が不十分なために苦しんでいる。だから労働者階級は、資本主義のもっとも広範な、もっとも自由な、もっとも急速な発展を無条件に利益としている。』だから、ブルジョア革命は、プロレタリアートにとってこの上なく有利である。ブルジョア革命は、プロレタリアートのために無条件に必要である。ブルジョア革命が、完全で、断固たるものであればあるほど、社会主義をめざすプロレタリアートのブルジョアジーとの闘争は、それだけ確実になるだろう（レーニン）

最小限綱領—民主主義綱領を基準とした、自由主義ブルジョアジー、小ブルインテリゲンチヤとの党派闘争と別個に進んで共に撃つ戦術、革命的農民との同盟—革命的民主主義的独裁と臨時革命政府樹立のスローガン—その人、民的性格を投影した民主主義闘争の型がある。この民主主義的変革は、直接的にはブルジョア的—社会的な社会II経済的諸関係の枠を越える事はないが、ロシアの経済的発展の程度（客観的条件）とプロレタリアートの広範な大衆の自覚と組織の程度（客

観的条件と切り離さないように結びついた主観的条件）では、労働者階級を即時完全に解放する事は不可能であった。しかしプロレタリアートは、政治的自由が自分達に必要な事を、それが直接にはブルジョアジーを強化組織するにもかかわらず、だれよりも自分達に必要な事を本能的に理解していた。プロレタリアートは、階級闘争を避けることに自分達の救いを期待せず、階級闘争の発展に、その幅、意識性、組織性、断固さの増大をそれを期待した。

「今日の革命が完全に勝利すれば、民主主義的変革は終って、社会主義的変革のための断固たる闘争が始まるだろう。今日の農民の諸要求が実現され、反動が完全に壊滅し、民主的共和制が闘い取られれば、ブルジョアジーの革命性はすっかりおしまいになり、小ブルジョアジーの革命性さえおしまいになるだろう。そして、社会主義のためのプロレタリアートのほんとうの闘争が始まるだろう。民主主義的変革が完全であればあるほど、この新しい闘争は、それだけはやく、ひろく、純粋に、断固として展開されるであろう。言いかえれば、民主主義的ブルジョアジーあるいは小ブルジョアジーがもう一段上にのぼるとき、革命が事実となるだけでなく、革命の完全な勝利が事実となるときには、—そのときには、われわれは民主主義的独裁のスローガンを、プロレタリアートの社会主義的独裁のスローガンで「すりかえる」であろう。（レーニン）つまり、ブルジョアジーは、この民主主義的変革を徹底して推し進める事はできない。これが、逆命題である。それは、不可避に、階級間矛盾の激成を、社会主義的変革に対する欲求を呼び醒まし、ブルジョアジーに対するプロレタリアートの戦争の舞台を提供する事になるからである。政治的自由と、民主主義的諸改革の蓄積は、一方に自由主義的資本主義的発展の社会II政治的基礎（賃労働を効率的に搾取するための）を整備であり、対極に階級闘争の合法的領域を拡大するディレンマを培養する。

しかし、このディレンマも、資本主義的発展の自己運動の動因の内、最終的転回を遂げる事になる。すなわち、民主主義的反対物

への転化、アンチテーゼとしての民主主義の揚棄—帝国主義的資本主義から社会主義への行程である。帝国主義は、その経済的基礎からする独占、その上部構造化—民族の抑圧と反動への欲求である。自由競争のその中から、その直接の対立物である独占自由競争を排除しないの成長は、同時に民主主義の対立物—民族的抑圧と反動への転化を準備したのである。プロレタリアート革命の農民階級—自由主義ブルジョアジーの民主主義的変革—ブルジョア革命の時代から、民主主義的改良を巡る階級間の平和的—議会主義的取り引きと譲歩の時代、そして今日、民主主義的変革の要求が直接的に社会主義を要求し、不可避的に階級間の暴力的決着を迫る時代へ到達した。民主主義を徹底的に発展させること、このような発展の諸形態を追求すること、これらの形態を實踐によって検証する事々々—すべてこうしたこととは、社会革命のための闘争の諸任務を構成するもの一つである。一つ一つをれば、どのような民主主義も社会主義をもたらし得るものではない。しかし、実生活では、民主主義は一つとして一つ一つとられるものではなく、「いっしょにとられる」ものであって、経済に対してもその影響をおよぼし、経済の改革を促進するとともに、経済的發展の影響をうける、等々。これが生きた歴史の弁証法である。(レーニン)

### 三、民主主義綱領か、プロレタリア的戦術か!

民主主義闘争の戦線に二つの潮流が存在している。第一の潮流—彼らは、民主主義的改訂のための闘争の、この段階的措置を把握できない。彼らは未だに一九〇五年の革命の段階から一歩も先へ進んでいない。民主主義的変革の拡大に、社会主義的有利な諸条件を整備すると言ふあのテーゼに頑迷に、ステティックに固執している。この社会主義革命の前後に、彼らは武装闘争の方針を確認するが、「武装蜂起のための社会心理的条件の準備」の爲の宣伝—煽動戦以上ではない。そして彼らは、その事によって民主主義が、一つ一つから取られるかもしれないという幻想を振り撒いて

かと言ふ不毛なスコラ論争である。前者は小ブル急進主義として、後者は本工純プロ主義として、民主主義派の自家確着を完成する。経済主義も又、その自然発生的本質からして民主主義の一つの頭れである。(経済民主主義とか、政経闘争と云ったスローガンに注目!) 民主主義闘争を反帝闘争として、経済(主義)闘争を政治闘争に揚棄するプロレタリア的戦術(目的意識性の外部注入)が要求されている。そしてその場面の環は、「権力問題」である。しかし彼らは、その民主主義派の本質から、反帝闘争に権力問題を、政治闘争に権力闘争として闘うこと、つまりは階級闘争を持ち込む事に恐怖する。彼らは、民主主義の破壊者として、きわめて熱っぽく、詳細に、分析的に、帝国主義の反動的な性格について、その排外的政策について、飽く事なくおしゃべりをくりかえすが、そのうちたとえ数行でいいから(レーニンの表現すれば、30分のうち5分でよいから)、プロレタリア独裁の思想や、革命のための具体的な措置について語る事があるだろうか。彼らは、国家警察—官僚軍と対峙している決起した革命的労働者人民の前で(このような衝突は、今日全国至る所で行っている)すら、このような現状分析を長々と説明するのである。レーニンは、一九〇五年の民主主義革命に際して、①専制—警察国家の反人民的性格の暴露、②最小限綱領(民主主義的)の宣伝、③武装蜂起の煽動、の三位一体的戦術を提起した。我々は今日、社会主義革命の前後に到達して、この透徹したレーニン主義戦術の普遍的—弁証法的向上のモメントを次のように定式化する。①帝国主義的専制—警察国家の反プロレタリア的の性格の暴露、②最小限綱領(プロレタリア的)の宣伝、③武装蜂起の煽動、の三位一体的戦術—プロレタリア的戦術を提起する。とりわけ、レーニンは第一級の任務として、蜂起のためにプロレタリアートを組織する精力的な方策を挙げている。我が民主主義派は、労働組合の経済主義的闘争以外は、民主主義闘争—政治闘争と認知する事から出発して、反帝闘争への昇華がこの円環を閉じる。これに、綱領を対置すれば、まさに歴史の逆戻り、民主主義社会の出現なのである。

いる。彼らはこの戦線に綱領(民主主義的)を持ち込み、けっきょくはこの戦線を一九〇五年のロシアまで後退させる。そしてまたぞろ社会主義革命を遠ざけるのである。『民主主義は、多数者への少数者の服従を承認する国家である。すなわち、一階級の他の階級に対する、住民の一部の他の部分に対する、系統的な暴力行使のための組織である。』(レーニン)この現代のジョーレス主義者は、民主主義のこの階級的な性格を理解できないから、戦術における人民的性格を際限なく膨張させる。民主主義が、ブルジョア民主主義としての階級的紐帯を露呈し、帝国主義的ブルジョアジーにとつても、革命的プロレタリアートにとつても、それが性格となつていく時代に、民主主義を一挙的に圧殺するか、社会主義として揚棄するかという時代に、唯一の戦術が武装カンパニアと反政府スローガンである。反動と抑圧、暴力の専横と排外主義の階級解体攻撃に、民主主義綱領を対置する総体としての民主主義派の歴史的使命は、ファシズムの露払いとしてのそれ以外にない。すでに歴史の風見鶏、小ブル—半プロ農民層は、ブルジョア民主主義の階級的基盤であったこの階層は、帝国主義的権力再編の過程で、この階級的基盤の解体と階級的没落—権力(ファシズム)プロ独)への傾斜を深めている。かの民主主義派が依拠するこの階層は、その階級的基盤から(没落を予感する)即自的に帝国主義とその政策に反対するが、私的所有の垂鉛から背離して、直線的に社会主義と結合する事はない。これが賃金労働者(鉄鎖以外に失なうべき何物も持たない)との階級本質的な相違である。賃金労働者は、とりわけ大工場制生産様式の中で教育—訓練された近代工業プロレタリアートは、社会主義のシエマを経験主義的に獲得するが、資本の構成要素としての賃労働の運命共同性—から経済主義のクビキを断ち切れず、賃闘—反合—待遇改善闘争等—に分かたを巡る—闘争が、帝国主義に反対する闘争として向上するのではなく、産業報国会運動に吸引される帝国主義労働運動へと転落する。民主主義派の追随主義は、この二つの階級—階層の流動に右往左往する。その典型が、地域闘争主義(地区党)か、生産点主義(産別党)

第二の潮流は、とりもなおさずプロ独—戦争派である。我々は、民主主義闘争が反帝闘争として外化せざるを得ない帝国主義改訂における民主主義闘争—反帝闘争に、民主主義綱領ではなく、プロ独綱領(最小限綱領)に導かれたプロレタリア的戦術を対置する。それは、民主主義が一つ一つからとられるものではなく、まとめてからとられるものだという事、我々が民主主義を是認するのは、その過去についてであつて、その未来についてでない、レーニンの厳密な指摘に依つてゐる。それは、プロレタリアートの革命的展開力(ブルジョアジーを暴力で粉碎し、小ブル—農民層の動揺性を排除する)に依拠した戦術である。そして、それは、プロレタリア独裁を承認し、それを射程に置いた戦術である。帝国主義に反対するだけでは不十分である。民主主義を揚棄する歴史の主人を押し出す戦術こそ我々は選択しなければならぬ。革命的な小ブル—半プロ農民層は、プロレタリア独裁のスローガンに恐怖するかもしれないが、彼らはこの階級的力—プロレタリア的戦術の展開力の前に、自分達の未来を見出すであらう。我々は、もし勝利を恐れるのでなければ、階級間闘争の戦術に導かれた武装蜂起の諸段階(一搾—デモンストレーション—市街戦—革命軍の諸部隊)の発展に、その合目的な戦術を採用しなければならない。それはけっして、武装蜂起の予備段階に相応の戦術ではないし、単一の軍事綱領でもない。それは真に革命的な、組織された、戦闘的、堅忍不拔の武装プロレタリアートの階級的力と、計画的な配置—系統的な指揮に立脚した階級の戦術である。それは、「政府と雇傭主」に対するプレッシャー戦術ではなく、国家警察軍とブルジョア国家機構を廃絶するための戦術である。つまりは、直接的に軍事問題であるところの戦術である。そうであるが故にこの戦術は、より広範に、大胆に、断固として貫徹されるであらうし、そうでなければならぬ。(完)

☆ プロレタリア革命戦士は、攻勢的戦術を駆使し、武装反革命軍—国家警察軍を攻囲殲滅せよ!



☆ すべての共産主義戦士は、プロ独一戦争派に結集し、蜂起—臨革政府樹立の陣型を構築せよ！  
☆ プロ独—社会主義をめざす共産主義革命の勝利万才！

## 「世界革命戦争戦略」—反帝プロレタリア革命戦争論序説

北川 明

### 第一章 現代過渡期世界—世界史的二重権力構造—防衛—対峙

#### 時—攻勢の力学

現代過渡期世界は、一九一七年のロシア革命の勝利—プロレタリア権力の樹立より成立する世界史的二重権力構造の構築に始まる。プロレタリア政治革命の勝利とその権力機関—労働ソビエトへの権力の集中、ソビエト社会主義共和国建國と社会主義永続革命の総路線の堅持へと進撃するプロレタリア階級の権力は、第三インターにおける左派ヘゲモニーの拡大とプロレタリア国際主義を巡る党派闘争の勝利の展開の下、国際帝国主義諸列強に拮抗する世界史的な二重権力状況を地理的に、つまりは物質的に創出したのである。この唯物論的転回と同時に、政治的力学—階級闘争における政治—軍事力の関係の攻防軸を変位したのである。その前史において、資本主義段階における窮乏化法則—富の集中と貧困の増大による階級的憤激—憎悪の醸成と二大階級への分化—蓄積からする無階級社会への自然発生的向上過程への社会科学の定型として潮流化してきた社会主義勢力の階級史観が、つまりは、資本主義社会の負の位相から陰面として抽出してきた社会主義の未来が、社会主義ソビエトの生産を契機として、その意識的—現実的実像を獲得するものである。論理的なものから歴史的なものへ、抽象的なものから具体的なものへの転化の契機が、そしてその反映として、自然発生的性の目的意識性への転化の契機が準備されたのである。

この最初の目的革命的勝利の波及性は、一義的に権力の物性に存在し、依拠すべき物質力—軍事に立脚した権力の実践性をこそ高め上げた事にある。この実践的要素の唯物論的定位置は、意識的要素の土台を提供し、意識的（社会主義的）労働者の階級形成的動因として作用する。二つの権力が存在する事、そこから、そこからのみ対自化される階級性的同定行程が、階級闘争の政治闘争としての止揚の過程が獲得されるのである。最初は非法法の党であり、そして階級の権力機関が、国家が、そして又党がこの反映の鏡であり、導きの糸である。この階級の権力が、この権力—組織された武装プロレタリアートの権力のみが、すべての人民の根拠地であり、階級的未来なのである。この最初に出現した権力に立脚して、世界プロレタリアートは攻勢の段階に移行した。この権力は、プロレタリアートの能動性を引き出し、活性化を促し、その階級的展開力を発揚した。そして何よりもまずその権力を防衛する為の戦術が、一国社会主義建設路線—永続革命とプロレタリア国際主義—統一戦線問題が第一級の任務として措上される。「一国においても社会主義革命は勝利するが、その最後の勝利—共産主義建設は世界革命を抜きにしては不可能である。」（レーニン）

現代過渡期世界は、一国における社会主義革命の勝利とプロレタリア権力の出現、先進国革命の流産による一国主義的路線化と合法的転落による官僚「社会主義」国家化、国際帝国主義間不均等発

展と体制間矛盾、反帝—反植民地民族解放戦争の前進の全範的攻勢の段階と規定できる。そしてこの大過程の下に、異なったウルクラウドを形成する二つのプロックが相互に媒介し、対峙しつつ世界史的な二重権力状況を支えている。この二つの歯車は運動し、ジグザグを繰り返しながらこのラセン的な大過程を向上している。この二つのプロックの三つの勢力（a..社会主義勢力、b..植民地革命的人民勢力、c..本国内プロレタリア勢力）においても階級闘争の政治力学は、防衛—対峙—攻勢の弁証法的過程を踏襲している。

① 「社会主義」ソビエトは、一九一七年の革命の前夜から、強力なブルジョア国家の包囲と介入、国内メンシェビキ（右派日和見主義）—トロツキズム（「左翼」主義小ブル主義）、国際社会排外派潮流（第二インター—カウッキイ主義）との党派闘争と、直接—間接の社会主義「防衛」戦争の時代であった。この時代は、その経済的基礎からすれば、国家資本主義的—社会主義原始蓄積過程であり、新経済政策（NEP）—社会主義競争—農業集団化—第一次—三次五カ年計画（重化学工業—基幹産業化）へと到る経済決定論—生産力主義の支配した時代である。又、社会—政治的には、その下部構造と分ち難く結合した一国社会主義建設路線の全面化と一枚岩の社会主義純血主義の徹底化、つまりは、ブルジョアなきブルジョア国家とそれに掉衡する暴力的統制—スターリン主義の確立過程に照応する。同時にその一国主義の路線は、「自国帝国主義の打倒」として定式化されたプロレタリア国際主義の内実を、「大祖国防衛戦争」への拜跪を強制する排外的空洞化、けっきょくはファシズムの拾頭に対抗する民主主義派への屈服（反ファシズム人民戦線）として結果する。帝国主義権力の予防反革命—階級解體を軸としたファシズムの拾頭と、その対極に階級和解の—自由主義的民主主義勢力の対抗的形成—プロック化の収縮化の中で、「帝国主義戦争を内乱へ」組織するのではなく、国際階級闘争を疎外—庄殺してゆく。二度にわたる帝国主義間戦争とその下での被抑圧民族の民族革命的蜂起—戦争の拡大と—連邦における人民—官僚「社会主義」体制（ス

ターリン体制）の確立をバネとした共産圏の形成—東西陣営の対極化は、パワポリンに支持された冷戦構造下の体制間矛盾を激成してゆく。モスクワ四国外相会議—コミンフォルム結成—コモコン設置—ワルシャワ条約機構の形成に至る対峙段階の収縮期から、コミンフォルムの解散—スターリン批判—モスクワ会議—フルシチョフ追放に至る停滞期（民主化の時代）、インドシナ革命戦争の勝利に始まる攻勢段階までの拡散期（分極化の時代）の時代である。この時代は同時に、戦後世界体制—米帝—国的支配体制の生成—没落の過程に照応する。Y—P体制の構築—トルマン—ドクトリン—NATO成立—（O—E—C—S—E—A—T—O—C—E—N—T—O）の生成発展期から、一九六〇年を頂点とした反植民地革命戦争の高揚と市場原理—不均等発展の矛盾に規制されたIMF—GATT体制のなしくずしの後退過程—分極化の没落期—退却と収縮—自国帝国主義強化—帝国主義間戦争の時代である。

この帝国主義間戦争の時代は、つまり、戦争と戦争の間の平和的取り引きの時代から次の帝国主義戦争の前夜、体制間矛盾の極端—欺瞞的平和共存政策の呪縛から解放された帝国主義諸列強の合法的弱肉強食の市場分割戦の前夜、戦争に備えた自国資本主義強化の収縮期に生じた帝国主義的支配域の空白部分—その弱い環にキューバ国際義勇軍を先兵としたソ連—スターリン主義の排外的拡張政策—攻勢的戦術のクサビが打ち込まれた。インドシナ革命戦争の勝利と、それに制約された超帝国主義的同盟政策（IMF体制）の破綻をバネとして、社会主義と—国主義の矛盾を外的インパクトに転嫁することの膨脹政策は、アンゴラ—モザンビク革命戦争への介入支援からナミビア—アパガニスタン—南イエメンでの軍事クーデターの画策、ベトナム—ラオス社会主義政権を取り込んだ対中共包囲網の形成、キューバ国際義勇軍化と、系統的な攻勢的戦術に特徴づけられている。この攻勢的戦術は、けっして、プロレタリアートの能動性と革命性に立脚した目的的プロレタリアの戦術では

なく、一國主義の蓄積した矛盾の外化—疎外態ではあるけれども、それは階級闘争史観の唯物論的必然性の発現であるという一点において堅固として擁護しなければならない。この国には、社会主義革命の最後の勝利に向けた階級の展開力は存在しないけれども、それでもなお唯物史観の原理は地下水脈を巡って自己運動を展開するのである。

⑩ 現代過渡期世界は、世界史的二重権力構造下、その主導軸を植民地—半植民地における反帝植民地革命戦争に転じた時代である。この連綿と続く民族革命的蜂起—戦争の展開力は、この攻勢的段階の大過程を牽引する機関車であり、その波及力は全世界を隈なく席卷する。まずはヨーロッパ周辺で、インド東南アジアで、中国で、そしてアフリカ、南アメリカで、自国資本主義の経済発展の諸段階と、それと分かち難く結びついたプロレタリア人民の成熟度に規定された様々の革命の型と形態を表現して前進する。「あきらかに、集積は、植民地の合併によってもまたおこなわれる。植民地とヨーロッパ諸民族—すくなくとも後者の多数—とのあいだの経済的区別は、以前には、植民地が商品交換にまきこまれながら、まだ資本主義の生産にまきこまれていないところであった。帝国主義は、これを変化させた。帝国主義は、とりわけ資本の輸出である。資本主義の生産はますます急速に植民地に移植されつつある。ヨーロッパの金融資本にたいする依存性から植民地をひきはなすことはできない。軍事的な見地からは、膨張(拡張)の見地からと同じように、植民地の分離は、通則としては、社会主義とともに初めて実現されるものであって、資本主義のもとでは、あるいは例外として、あるいは植民地ならびに本国における一連の革命と蜂起とを代償として実現されるものである。」(レーニン「自決にかんする討論の決算」)この短い文章の中に、民族自決問題の経済的基礎とその上部構造との関係が簡潔に描写されている。この描写は、抑圧民族と被抑圧民族への諸民族の分裂が、帝国主義のもとにおける基本的な、もとも本質的な、不可避なものであるというあの命題に連鎖して、

この時代の一連の民族解放戦争の世界史的役割をおしだしている。資本主義の特殊な、最高段階としてある帝国主義段階は、その本質からして領土的併合と民族的抑圧の欲望の体系であり、より直接的に、植民地—半植民地を下部構造としており(資本輸出を軸として)、その垂直的ヒエラルヒーは、収奪と搾取の汲み上げポンプである。そうであるが故に、この民族的叛乱は直接的に帝国主義の膨張の源泉を断ち、その交通を遮断する。しかし金融資本の網の目は、買収と軍事的専横でこの国家行政の全機関—商業流通、基幹産業の全部門を占有しているから、民族革命的反乱の最後の勝利はこの全植民地国家機構の転覆—粉砕を抜きにしては貫徹し得ない。そしてこれらの植民地—半植民地は、帝国主義国家間国家分業体制の基礎的構成要素であり、その産業構造の畸形的成長によって自立化する、社会分業体制の全体性を喪失していると同時に、買弁—国外資本の強蓄積的社会的資本の侵入による民族的—国家的資本の駆逐—排除によって国家資本主義の発展の諸段階をスポイルされているが故に、この作業は先進資本主義間におけるよりより容易であり、社会主義建設の事業はより困難である。しかし、原材料資源の強盗的略取と商品経済導入の原始的強蓄積としてあった重商—産業資本主義段階における植民地主義的侵略が、その彼岸に進歩的—ブルジョアのナショナリズムを形成したその段階から相違して、資本の輸出を軸とした帝国主義的経済侵略の段階は、資本主義的社会諸関係の強積的導入—労働力の商品化—都市下層産業労働者層の形成による民族的植民地闘争の階級闘争への転化が準備される。そしてこの階級闘争は、国家が国家を搾取する帝国主義時代に相応して、階級間矛盾の国家間矛盾(宗主国—植民地)への転化として反帝植民地革命戦争の大道を描き清めるのである。この革命戦争の階級的—意識的性格は、必然的に階級なき社会—共産主義への第一歩—社会主義社会への道程へ引き込むであろうし、またそうであった。反帝帝国主義の後進国革命が必然的に社会主義へ到る事、そしてその社会主義革命の一時代における一國主義的建設の段階は不可避である事、一國主義と社会主

義の矛盾は世界革命によってしか止揚され得ない事、これらの事がロシア革命以降の後進国革命の系譜の中で歴史的に実証されている。もちろん、これらの一連の革命の中で、いくつかの例外の存在を挙げる事ができるかもしれないが、それらの国家は、けっきょくは今日もなお国家的搾取と民族的隷属のクビキの下にあるのではないか。そしてこの一時代における一國主義的建設の段階こそが現代過渡期世界の現段階であり、ロシア革命以降の一統きの時代である。ロシア革命が始まり、東欧—中国—インドシナ—アフリカと連綿するこの後進国革命の時代である。

⑪ 二度にわたる世界的帝国主義間戦争を通じて、国際帝国主義は、地球上の最後の辺境域に到るまでその力に応じて分割支配を完了した。不均等発展と、市場原理の合法的自己矛盾を弱肉強食の暴力的手段、つまりは帝国主義戦争によって突破してきた帝国主義勢力は、今日もなおその無政府的な衝動の前に無力である。「経済的には、帝国主義は資本主義の最後の発展段階、すなわち、競争の自由に独占が交替するほどに、それほど生産が大規模に、巨大な規模になった段階である。この点に帝国主義の経済の本質がある。独占は、トラスト、シンジケート、その他のうちにも、巨大銀行の全能の力のうちにも、原料資源の買占めその他のうちにも、銀行資本の集中等々のうちにも、あらわれている。経済的独占のうちに、すべての問題がある。民主主義から政治的反動への転換が、新しい経済のうに、独占資本主義(帝国主義は独占資本主義である)のうに立つ政治的上層建築である。自由競争には民主主義が照応する。独占には政治的反動が照応する。」(マルクス主義の漫画および「帝国主義的経済主義」について：レーニン)帝国主義は、一様な外観を有し、その発展の段階に客観的な区分はない。あるのは、生成—発展—没落の原理的な自然発生的な内的動因に強制された自己運動の行程であり、自己破滅的な最後である。そこにあるのは政治的反動と民族的抑圧の体系であり、領土的併合の欲望である。戦争と戦争の間の平和的な取り引きの時代には、軍備の拡張と自国経済圏の拡

大の膨張主義的経済侵略を、同盟と対外条約の欺瞞的粉飾の下に準備する。しかし、行政権の肥大化—コントロールを通じて諸々の修正資本主義的—国家資本主義的政策にもかかわらず、その超帝国主義的国際同盟にもかかわらず、帝国主義が帝国主義である限り、その侵略的抑圧的軍事専横の本質から背理する事はできない。現代過渡期世界は、その帝国主義の本質から規定して、その前史と具体隔てな変質の契機が存在しているわけではない。しかし、その具体的政治的—経済的局面における外的規制力の発生—異物の混入は、その一元的統制力—均質性の化学変化の結果した。それは、東西陣営の形成と冷戦構造下における体制間矛盾の激成として現象する。この体制間矛盾の基調は、この「共産圏」をも射程に置いた帝国主義的膨張政策と、プロレタリア国際主義を標榜する社会主義的—階級的対外政策、つまりは世界史的攻勢段階における逆制約の能動性との衝突としてある。その直接の原動力は、とりもなおさず反帝植民地革命戦争の階級的展開力であり、勝利した「社会主義」国家のその後方としての防衛戦争戦略である。この非資本主義的ウクラウドの拡大は、帝国主義的再生産構造の土台、その最基底を削り取り、その市場を縮少—圧迫するが、その事によって帝国主義のあの野蛮な欲望が排除されるものではない。むしろその反対に、小さくなったパイの分け前を求めて、より一層狂暴に、直截にその吸血鬼的本性を露わにするのである。帝国主義のあの野蛮な欲望の前に、「社会主義」国家と、非社会主義国家の区別はない。来たべき史上三度目の帝国主義市場分割戦は、もし世界革命が勝利しなければ、「社会主義」国家の分割をも対象とした体制間戦争として展開されるだろう。

インドシナにおける反革命的侵略の敗北と、それを契機とした米帝一元の戦後支配体制の後退—分極収縮化は、新たなこの帝国主義戦争の危険性を醸成している。米帝予防革命駐留軍の撤退と自国防衛力強化政策への転換は、金融資本と結びついた軍需産業の産業基幹構造化と排外主義的国家主義イデオロギの世論形成、公共事

この時代の一連の民族解放戦争の世界史的役割をおしだしている。資本主義の特殊な、最高段階としてある帝国主義段階は、その本質からして領土的併合と民族的抑圧の欲望の体系であり、より直接的に、植民地—半植民地を下部構造としており(資本輸出を軸として)、その垂直的ヒエラルヒーは、収奪と搾取の汲み上げポンプである。そうであるが故に、この民族的叛乱は直接的に帝国主義の膨張の源泉を断ち、その交通を遮断する。しかし金融資本の網の目は、買収と軍事的専横でこの国家行政の全機関—商業流通、基幹産業の全部門を占有しているから、民族革命的反乱の最後の勝利はこの全植民地国家機構の転覆—粉砕を抜きにしては貫徹し得ない。そしてこれらの植民地—半植民地は、帝国主義国家間国家分業体制の基礎的構成要素であり、その産業構造の畸形的成長によって自立化する、社会分業体制の全体性を喪失していると同時に、買弁—国外資本の強蓄積的社会的資本の侵入による民族的—国家的資本の駆逐—排除によって国家資本主義の発展の諸段階をスポイルされているが故に、この作業は先進資本主義間におけるよりより容易であり、社会主義建設の事業はより困難である。しかし、原材料資源の強盗的略取と商品経済導入の原始的強蓄積としてあった重商—産業資本主義段階における植民地主義的侵略が、その彼岸に進歩的—ブルジョアのナショナリズムを形成したその段階から相違して、資本の輸出を軸とした帝国主義的経済侵略の段階は、資本主義的社会諸関係の強積的導入—労働力の商品化—都市下層産業労働者層の形成による民族的植民地闘争の階級闘争への転化が準備される。そしてこの階級闘争は、国家が国家を搾取する帝国主義時代に相応して、階級間矛盾の国家間矛盾(宗主国—植民地)への転化として反帝植民地革命戦争の大道を描き清めるのである。この革命戦争の階級的—意識的性格は、必然的に階級なき社会—共産主義への第一歩—社会主義社会への道程へ引き込むであろうし、またそうであった。反帝帝国主義の後進国革命が必然的に社会主義へ到る事、そしてその社会主義革命の一時代における一國主義的建設の段階は不可避である事、一國主義と社会主

業と財政的手段を通じて経済の行政統制等、なしくずしの戦争体制への布石として準備される。それは、恒常的な局地戦争と、圧倒的な米帝軍事支配体制下（NATO—SEATO—CENTO）にある、過剰流通戦費ドルの暴雨的バラマキとそれを土台としたIMF体制のドル基軸通貨政策、その域内流入—対米ドル圏市場への依存に立脚した高度成長政策—インフレ政策、それを基盤とした重化学工業化と資本構成の高度化—国独資化として、帝国主義的發展の延長に登場する。それは同時に、帝国主義的發展の不均等性の結果であり、力の均衡と諸々の超帝国主義政策の假構性（IMPEBE）に支えられた平和的取り引きの時代から、弱肉強食の能力に依じた市場再分割戦への突入の開始である。IMF—GATT体制の事実上の崩壊の契機であるスミソニアン体制の崩壊が、ベトナム予防反革命侵略戦争の敗北と期を共にしているのは、歴史の偶然ではない。つまりは、二つの動因が、この現代過渡期世界とその前史を画する二つの社会体制の、二つの勢力間の、決定的な力関係の逆転と逆制約の能動性の展開力が、帝国主義の内的矛盾を外延化するその延命の余白を閉じたのである。今や、帝国主義の不均等發展と市場原理の矛盾は、内在化せざるをえず、域内における調整と修復の取り引きに終始せざるを得ない。ランパイエに始まる先進国首脳会議のジグザグの場当りの対応は、この帝国主義間水平分業体制を示しており、来たるべき帝国主義戦争に備えた前哨戦—牽制戦としてある。またSALT II—MRFAも対ソ戦力弱体化政策であると同時に、反ソパネを軸とした帝国主義の一体性の解体を招かざるにはおかない。歴史はすでに、帝国主義戦争の前夜の訪れを告知しており、来たるべき戦争の型と性質をこかしこに指示している。この現状以後は、世界的な二重権力構造化における攻防の軸を、ロシア革命以後の攻勢的段階における世界革命戦争の前進と、帝国主義の合法的諸矛盾との対立構図の中で指定してゆく作業である。この構図を基礎とした世界革命戦争戦略の図式を次章において展開

する。

## 第二章 世界同時革命—三ブロック階級闘争論の歴史的止揚のために！

前章において展開された「現代過渡期世界論」—世界史的二重権力構造化において、階級闘争の發展の諸段階と、その歴史的過程を詳述した。ロシア革命の勝利とプロレタリア政治権力の樹立—「社会主義」—国家建設を契機とする世界階級闘争の攻勢段階への移行は、政治体制と、経済的發展の諸段階、それと不可分に結合されたML主義の成熟度に規定された様々な革命の型を創出した。それは、単一の帝国主義—元的歴史過程における経済的發展の不均等性と、国家が国家を支配し搾取する帝国主義ヒエラルヒーの上に構想された革命戦略に立脚している。「社会主義革命は、一つの行動ではなく、一つの戦線にわたる一つの戦闘ではなく、激烈な階級的衝突の一時代であり、全戦線にわたる、すなわち経済および政治上のあらゆる問題にかんする、長くつづく幾多の戦闘であって、この戦闘はブルジョアジーの収奪（プロ独）としてのみおわりうるものである。」（レーニン—社会主義革命と民主主義のための闘争）

### ② 「社会主義戦争」—攻勢的戦術—「社会主義」—国家からする階級戦争

「一国で勝利をおさめた社会主義は、一挙にあらゆる戦争一般をけつて排除するものではない。反対に、それは戦争を予想するのである。資本主義の發展は、さまざまな国で、きわめて不均等におこなわれる。商品生産のもとでは、それ以外ではありえないのである。したがって社会主義は、すべての国で同時に勝利することはできないという否定しがたい結論が出てくるのである。社会主義はいくらか期間または数カ国で勝利するであろうが、その残りの国は、じくらかの間はブルジョア的あるいは前ブルジョア的の国にとどまるであろう。このことは、摩擦をひきおこすばかりでなく、社会主義国家の勝利をかちとったプロレタリアートを粉砕しようとする

他の国々のブルジョアジーの直接の努力をよびおこすにちがいない。このような場合、われわれの側からの戦争は正当であり、正義であろう。それは社会主義のための戦争であり、他の諸民族をブルジョアジーから解放するための戦争であろう。—「防衛戦争」—「レーニン—プロレタリア革命の軍事綱領」

勝利をかちとったプロレタリアートによる祖国防衛戦争の段階—一九四五年から冷戦構造下の対峙段階を経て、人民—官僚「社会主義」—国家は、直接に社会主義革命を援助する攻勢的戦術を採用した。それは、反帝植民地革命戦争の後方—根拠地として作用した対峙段階から帝国主義間闘争の開始と反共包圍網の分散化を背景に、一國主義—社会主義分業体制の矛盾の外化—排外的的擴張政策へと変化したゆく段階である。インドシナ革命戦争の勝利以後、アングラ—モザンビーク—エチオピアと転戦するキューバ国際義勇軍の「革命の輸出」、路線と軍事介入、アフガニスタン—南イエメンでの親ソ政権樹立介入、インドシナにおける反中共包圍網の画策等、この攻勢的戦術—「社会主義戦争」は、植民地革命戦争の直接の同盟軍として国境を彼岸より突破し、民族革命的戦争を社会主義化する役割を担っている。ソ連スターリン主義にとつてこの路線は、内的矛盾に強制されたものといえ体制間矛盾の実践的な解決の道であり、国際共産主義運動におけるヘゲモニーの強化とプロレタリア国際主義の大義に合致している。この軍事的攻勢的戦術は、同時に政治的攻勢の重層する第二戦線に支えられている。核戦争防止協定—全欧安保首脳会議—MRFA—SALT IIと連動する対米軍備削減交渉は、米帝—元的反共軍事支配体制の弱体化と、その結果として帝国主義間軍事の一体性の崩壊—平準化と軍拡競争への傾斜を促進する反帝分析政策として準備されている。今日の戦争の（帝国主義間—体制間）主導性は、この戦線において拡大されている。

### ③ 「反帝植民地革命戦争」—「植民地—半植民地」—国家からする階級戦争

植民地戦争がいっぱいある。しかし、世界の大多数の民族の帝国主義的抑圧者であるわれわれヨーロッパ人には、もたまえの卑劣なヨーロッパ人的排外主義がつきまとっているが、そういうわれわれが「植民地戦争」と名づけているものは、しばしばこれら被抑圧民族の民族戦争であり、あるいは民族的蜂起である。帝国主義の最も基本的な特質の一つは、それが最もおくれた諸国で資本主義の發展を促進し、またそうすることによって民族的抑圧に反対する闘争を拡大し、激化させていくことである。これは事実である。そしてここから不可避的にでくくる結論は、帝国主義がしばしば民族戦争を生みだすにちがいないということである。」（レーニン—プロレタリア革命の軍事綱領）

産業資本主義段階における資本主義的自由競争の諸原理が、民主主義的諸原則—形態の本質的基盤であったその同じ土台の上で、民族革命的蜂起—戦争は、進歩的ブルジョア階級に領導された事業であった。それは、民族自決と民族的独立の欲求に喚起されたナショナリズム運動の高揚と、宗主国内ブルジョア民主主義との結合の上で立った反植民地主義闘争—分離の要求として歴史性を獲得した。そして帝国主義は、民族的抑圧と領土的併合の欲望であり、独占は政治的反動に照応している。帝国主義の基本的な植民地政策は、軍事的専横と資本の輸出、買弁ブルジョアジーの育成とカイライイ政権の買収である。国家を支配し、搾取する。土地と資源を略取し、労働力を商品化し収奪する。つまりは、帝国主義垂直運動の最基底層として直接に資本主義化する。それは、本国内階級間矛盾の外延化—貧困と零落、民族的差別と抑圧の強権的蓄積—階級間矛盾の国家間矛盾への転化として、後進国民族を階級化する。階級化された被抑圧民族にとつて、帝国主義は体制的憎悪であり、その民族の未来は、不可避的に、反帝国主義闘争として組織される革命戦争として、社会主義へと達着する。植民地国家—半国家における経済的發展の未成熟性—社会的分業の未分化と国民経済の畸形的發展と、それと不可分に結合した階級的未成熟性は、当然にもその戦争の型と戦略

の独自性を要求する。軍事が、暴力的手段でもって政治の延長である真理からすれば、この事は自明であり、後進国革命の型を定立する。つまりは、立脚する階級の基礎の民族的・人民的性格からする「人民」戦争路線(労働同盟)と、その支配構造からする「農村が都市を包囲する」(戦略(第三世界革命論等)がそうであり、その戦略が政治を決定する)一國社会主義建設路線である。この「反帝植民地革命戦争」は、「社会主義」国家を後方―根拠地とし、それへの合流と社会主義永続革命をバネとした「社会主義戦争」への転化としてラセンの向上過程を踏襲する。これが、政治―軍事の弁証法的展開である。

### 第三章 プロ独―蜂起を組織する内戦戦略―反帝プロレタリア

#### 革命戦争の型

① 「反帝プロレタリア革命戦争」(都市ゲリラ戦争)―帝国主義  
本国内階級戦争―世界革命戦争

「内戦もやはり戦争である。階級闘争をみとめる者は、内戦をみとめざるを得ない。内戦は、あらゆる階級社会では階級闘争が自然に、ある条件のもとでは、不可避的に継続され、発展し、激化したものである。あらゆる大革命がこのことを確認している。内戦を否定し、あるいは忘れることは、極端な日和見主義におちいり、社会主義革命を断念することを意味するであろう。」(レーニン―プロレタリア革命の軍事綱領)

内戦をこそ組織しなければならない。それは、プロレタリア革命党の第一級の任務であり、一義的に階級政策であるところの戦術である。全般的な、連続する蜂起に結節する前段の内戦と、その蜂起の階級的力を立脚した階級間総力戦の、世界を戦場とする世界革命戦争の全行程をこそ獲得しなければならない。この行程は、端的に職業革命家の党によって、非公然―非合法に組織された意識的―社会主義的労働者の密集した隊列―軍隊の目的意識的軍事―殲滅戦の都市ゲリラ戦争の先行する段階から、その軍事的展開力を軸に組

織される労働者地下経営細胞の系統的な配置と、計画的な戦術をもって組織される全般的な武装蜂起の段階、そして、その組織された武装プロレタリアートの権力機関―臨時革命政府の此岸から国境を突破する世界革命の段階へと、それは間断なく、あるいは重層化して水陸する一時代である。

先進国―帝国主義本国内階級闘争からする階級間戦争―反帝プロレタリア革命戦争の型―形態は、必然的にこの現代過渡期世界における単一の帝国主義的メカニズムに規定される。それは、帝国主義的支配―被支配の構造―力学の政治的解析と軍事的指図から抽象される真に実践的科学的な戦術である。本國と植民地に通底する階級間矛盾のラセンの成長と転嫁―逆流、制約―逆制約のメカニズムを、本国内階級関係の主導的動因に引き寄せ、本国内プロレタリアートの世界的―前衛的役割を同定する戦術である。本国内階級間矛盾の国家間矛盾への転嫁と、その反映―帝国主義的世界観に依拠した後進国革命の戦略―第三世界革命論―「農村が都市を包囲する」―と、その型―人民戦争路線に、本国内プロレタリアートは、自国帝国主義打倒のプロレタリア国際主義でもって呼応しなければならぬ。

「社会主義が実現されるのは、あらゆる国のプロレタリアートの統一された行動によってではなく、先進資本主義の発展段階に到達した少数の諸国のプロレタリアートの統一された行動によってである。」(レーニン―マルクス主義の漫画および帝国主義的経済主義について)

先進資本主義国家は世界の都市であり、国家としてのブルジョア国家である。それは、後進植民地国家が、世界の農村であり、買弁ブルに支配された労働者国家(国家としての)であるのと一対の対比である。それは、帝国主義時代における階級関係の国家間関係への転嫁、投影であり、本国内階級間矛盾の外延化―疎外感である。後進国プロレタリア人民からすれば、すなわち階級闘争が、買弁ブルと宗主国を直接の敵とする民族独立的、民族革命的蜂起―戦争として

発現する必然性が存在するのである。そして、その必然性は同時に、その革命の未来を不可避的に決定する。すなわち、民族的國家と、一國社会主義建設の路線である。後進国からする階級闘争にとって、この結末は、合法的であり、合目的であり、すぐれてM.L.S.主義的戦略―戦術である。が、先進帝国主義本国内プロレタリアートからする階級闘争にとっては、それは、同化するべき単一の路線ではない。この図式は、帝国主義ブルジョアが、自らの階級の延命を賭して描き出した、現実の具体的な運動であるところの拡張主義に負っているが、その原動力はとりもたず本国内階級間矛盾の非和解性由来している。本国内プロレタリアートにとって、敵は自國ブルジョア以外にはあり得ず、この敵を打倒する事なくして世界プロレタリアートの解放はあり得ない。また、この事業へ依拠する事なくして、後進国革命の「社会主義」國家の最後の勝利はありえない。そうであるが故に、本国内階級闘争は、その当初より一國の―民族的制約性から自由であり、それは同時に世界革命であるところの奪権闘争である。世界プロレタリアートと、国際ブルジョアジーの最後の決着は、この戦場において、まさに階級間総力戦として戦取される。

「都市から農村へ」、此岸より国境を突破し、反帝植民地革命戦争の一國性―民族的偏狭性を揚棄し、社会主義戦争と結合する、これが我々の世界革命戦争戦略の基軸である。「都市から始める」事は、その戦術の見地からしても、戦略の高地に領導された実践的な科学性を獲得している。その詳論は別稿に譲る。つまりは、敵のいる場所を闘うという事である。敵の密集した軍事的拠点、官僚機構の中核―都市を撃つという当為の戦術である。それは、世界の都市―帝国主義本國の戦略的観点と二重に照射された戦術的対応である。それは、戦争に先立つ具体的な現実的な政治から抽出された軍事綱領である。

端的に、職業革命家兵士とその軍隊―中央軍によって戦端を切り拓かれる都市ゲリラ戦争は、敵武装反革命政治軍―國家警察軍に

対する軍事殲滅戦を軸に組織された、密集した非公然の軍事組織―労働者地下軍事経営細胞に立脚した党独裁権力の確立―物質化のための戦争である。この権力は、直接にプロレタリアートの軍事的展開力と組織性に立脚しており、プロレタリア独裁の萌芽形態である。この軍事は、プロレタリアの戦術―①殲滅戦の軍事、②攻勢の戦術によって階級的力を発揚し、具体的に組織活動であるところの別的手段でもって政治的延長である。先進的で革命的なプロレタリアートは、この確実に勝利する、計画的な戦術とその戦果の上に、自らの階級の解放の方途を発見するだろう。この戦争は、一人の敵を殲滅し、その過程で、一人の味方を獲得する組織戦である。一つの作戦が、策源―兵站―戦線を回路する秘密地下細胞の建設と、その攻陣の陣型の構築を要求し、系統的な指揮と権力の集中、規律と統制の任務に習熟する事を要求する。この幾重にも重複した、互いに連鎖する秘密地下細胞―革命戦線の系統的な運営と拡大が、その技術的蓄積と機動力が、来たるべき大開戦に、ゼネストに、そして全般的な武装蜂起に勝利を保証する具体的な措置である。革命戦線は、共産主義者を構成員とする労働者地下軍事経営細胞を単位として、党中央の統括の下に、地区軍事委に編成される臨時革命政府の母胎である。決起した武装プロレタリアートの権力機関―臨時革命政府は、世界プロレタリアートの出撃拠点であり、世界革命戦争の兼源である。そして、この行程における唯一無二の組織戦術は、すなわち革命戦争である。戦争によって軍を編み、軍によって戦争を展開する。このラセンの向上過程の量から質への転化の結節戦に、支配階級としての労働者階級の形成が、全般的な武装蜂起のエポックが準備されるのである。このプロ独と蜂起を組織する内戦戦略―都市ゲリラ戦争の開始こそ、あの六九年九月、全世界のブルジョアジーに発せられた「世界革命戦争宣言」の内実なのである。

最後に、この革命に先立つ具体的な政治に無自覚な諸君に批判を加えたい。つまり、後進国―植民地革命派(毛派系―プント諸派、革左、東アジア反日武装戦線、辺境革命派等)の諸君と、先進国革命

## 綱領草案

### 第一章 資本主義と階級闘争

(1) 歴史は階級闘争の歴史であり、その時代の生産関係に規定された諸階級が不断に対立し、公然・陰然たる抑圧者と被抑圧者との闘争が存在する。その最終のものとして、我々の時代の階級闘争、すなわち資本主義時代における二大階級たるブルジョアジーとプロレタリアートの闘争が存在している。

(2) 今日資本主義的生産関係の発展は、小規模生産を全ゆるところで大規模生産にとって替え、生産関係における小所有者は、その零落を不可避とされ、その没落は増大し、それは結果として、無産

そして他方での賃金労働者の貧窮と抑圧が相互に益々急速に増大しているということの意味している。また生産手段の改良と発展は、生産関係を拡大することにおいて、この生産手段の資本家への独占と資本関係として賃金労働者の貧窮と抑圧が不可避に資本への労働者の経済的隷属、つまり、賃金奴隷制として発展せざるを得ないことを加速化させるにすぎない。

(3) しかし、そうであるが故に、この資本主義的生産関係そのものは、プロレタリアート自身の不断の憤激、反抗の増大を呼び起し、全ゆる労働現場での深刻で徹底的なプロレタリアートとブルジョアジーとの階級闘争を発生させる。このブルジョアジーとプロレタリアートの生産手段を巡る闘い、すなわち資本主義下に於ける階級闘争は、まったく非和解的である。

(4) プロレタリアートが原始共産制構成員、奴隷、農奴などのように彼らが直接に生産手段の一部であるのではなく、他方一切の生産手段を所有しないという意味での二重に自由な存在であることが、旧来の原始共産制構成員や被搾取階級と近代工業プロレタリアートを区別し、階級対立そのものを止揚する階級としてプロレタリアートが存在することの根拠である。また生産および流通の手段の集積と労働過程の社会化はプロレタリアートに益々単一の団結を創出させる。これらの事が資本主義的生産関係そのものを止揚する物質的基礎である。つまり資本は自ら発展成長するにつれて、その内部に自らを廃絶する土台を益々成長させるのである。階級闘争はプロレタリアートの勝利として結果せざるを得ない。

(5) この階級対立の終焉は、社会の一部による他の部分への経済的従属を廃止することによって初めてもたらされる。すなわち人間労働の疎外および搾取として表現される賃金奴隷制を基礎とする所有と労働の分離の廃絶である。これは生産手段の私的所有の廃止と、その社会的所有への転化、およびプロレタリアート自身による共同

体性を掌握しうる能力を獲得しているのであり、世界革命の展望を切り拓けるのである。

後者の諸君は、この関係が逆転している。彼らには、経済的發展の諸段階が、それを規定しているところの、後進国革命の型と形態、その必然性と合法性が理解できない。彼らは、単一の軍事綱領主義者であって、帝国主義の一元的な運動で世界を説明する。彼らは、批判はするが、それを変革する理論も手段ももちあわせていない。そして、けっきょくのところ帝国主義的経済主義の一国主義である。(未完)

日本プロレタリア人民は、世界革命戦争の大道―反帝プロレタリア革命戦争に決起し、世界プロ独樹立―社会主義建設の共産主義革命に勝利しよう！

労働者への転化とその増大への速度を速め、全ゆる人民大衆を賃金労働者としての階級の立場へと成立させている。

(3) 資本の生産過程は商品の生産過程であり、剰余価値、つまり不労労働の生産過程である。そして資本と賃労働関係自体の拡大再生産過程である。これを土台とする資本主義的生産関係の発展は、生産手段を資本家が私的に所有し、賃金労働者は、自己の労働力を商品として販売する以外の生存維持の手段を持ち得ないということにおいて、すなわち所有と労働の分離を基礎とする賃金奴隷制という存在故に、一方には資本家を、他方には、賃金労働者を再生産する。と同時に剰余価値より生ずる富の一部の大資本家への集中と、社会主義的生産を行うことによって確立される。そして社会主義社会下における生産力の発展と社会革命によって八能力に応じた労働と、必要に応じた分配の實現という共産主義社会の成立に至る。プロレタリアートの闘争の終局目標はこれ以外になく、このことがプロレタリアートの完全解放の唯一の絶対的な条件である。

(6) 今日、このプロレタリアートの解放の闘いに直接的に敵対しているものは資本主義国家であり、その政府である。この政治機関は、私的所有と賃労働制を維持する為のブルジョアジーの暴力装置であり、ブルジョア独裁である。そうであるが故にプロレタリアートの闘いの第一の課題は資本主義国家への闘いであり、そしてその国家の打倒でなければならない。つまり、階級闘争は政治闘争とならざるを得ない。

(7) この階級闘争は同時に、資本そのものが国家民族をこえて、全世界的にその生産関係を維持し、世界市場という単一的土台を有する事と、他方、この生産関係の世界化、均質化から創出されるプロレタリアートの世界的同質性に於いて単なる一国的なプロレタリアートとブルジョアジーの闘いではなく、世界的闘争として発展、成長せざるを得ない。一国の階級闘争は世界プロレタリアートの解放闘争の一部である。

(8) 同時にこの階級闘争の発展と社会革命の勝利の不可欠な要素として、生産手段の共有を保護し、労働の平等と生産物の平等な分配を維持する為、これに敵対する全ゆる社会的残存を除去し、社会革命の発展を維持するものとして過渡的なプロレタリアートの執行権力が必要である。これはプロレタリアート独裁という権力基盤を有せざるを得ないし、もとより世界プロレタリアート独裁でなければならない。

(9) 暴力は社会革命に於ける助産婦である。それ故資本主義下に於ける階級闘争はプロレタリアートの解放の政治的手段のひとつとして絶対的な暴力の行使を展開せねばならない。

## 第二章 現代過渡期世界とプロレタリアート

(1) 資本主義の生産の発展は、大企業への生産の集中を生み出し、競争に於いて独占への転化が生まれる。この過程で銀行資本と産業資本の融合や癒着が生まれ、これを基礎に金融寡頭制が作り出された。この資本主義の帝国主義段階はさらに資本の輸出が商品の輸出にかわって典型となり、資本家団体のあいだで地球上の全領土の分割が完了した段階である。帝国主義の不均等発展は分割された植民地の再分割戦を必然化せざるを得ず、帝国主義間強盗戦争を不可避とする。

(2) 帝国主義は労働者階級に対する搾取と収奪をますます強め、世界の大半の民族は被抑圧民族として野蛮な侵略の対象となる。それに對して労働者階級と被抑圧民族の自然発生的闘いは激発し、組織的、世界的なものとして成長する。

(3) 労働者階級、被抑圧民族への弾圧、強盗戦争に備え、また、資本の過剰を処理する上での経済政策の必要性にせまられ、帝国主義国家は、金融寡頭制の利益を守る為ますます官僚機構、軍事機構を肥大化させ、同時に帝国主義は、植民地侵略の超過利潤の一部でもって、労働者階級の一部を買収し、帝国主義労働運動を育成する。この労働者階級の特権層は社会排外主義の温床となり、労働者階級の闘いに敵対してくる。

(4) 第一次大戦後の不均等発展は、米帝過剰資本の対独輸出を減少させ、世界経済の一体性を崩壊する道にみちびき、世界恐慌を生み出した。こうした中で帝国主義ブルジョアジーは慢性的な過剰資本や失業、小ブルの経済的破綻が生み出す階級矛盾に對して、無力性を露呈した金融寡頭制に国家を体制的に結合させることによって

克服をめざした。すなわち、国独資は管理通貨制とインフレ政策を駆使し、ブロック化と行政権の肥大化でもって危機に對したのである。この30年代の危機は第二次世界大戦の結果化した。

(5) 大戦後、西欧諸国は第二次世界大戦の結果、外貨不足におちいり、米帝はひとり資本の過剰をひきずった。一方でアジア東欧において、労働者国家が成立、拡大し民族解放闘争の前進は植民地の政治的独立をかちとった。帝国主義国労働者階級も、体制的危機に對し、革命運動でこたえていった。かかる基本的な戦後状況に規定されて、国独資諸国は世界市場の統一性の確保と激しく昂揚する労働者階級、被抑圧民族の革命運動に對して共同した、侵略反革命体制の構築を迫られた。その内容が国際反革命同盟であり、I M F、G A T Tと、それを支える米帝の対外援助である。そして、このような戦後の帝国主義体制は五八〇六〇年のE D C O POND危機を契機として根底的な危機の時代に突入した。

(6) 帝国主義間の不均等発展と米帝のドルレ流しを主因とする戦後体制の危機は、I M F体制の崩壊、保護貿易主義の抬頭などの国際的な経済的統一性の動揺とプロレタリアート、被抑圧民族への犠牲転嫁として、過剰資本をどうしようもないまま、深く広く進行している。しかし全世界的な革命運動の強化と戦略的軍事力で抵抗する「社会主義陣営」に對する国際反革命の要求は、国独資戦後体制の崩壊をなくし、せざるを得なくなっている。このなし崩しの危機の泥沼化は議会、組合を通じての社民、社民の体制化を不可避としており、国際的には平和共存を一時的な政治的延命策としている。そして、これは一方で假借なき侵略反革命とファッショ化の内面的構築である。しかし、この過程はより決定的なプロレタリアート、被抑圧民族の犠牲なしにはあり得ず、資本主義最後の大会戦へ導かざるをえない。

(7) ロシア革命はロシア労働者階級と農民階級の同盟による革命であり、この同盟関係の中で、プロレタリアート独裁路線は敗北し、官僚機構、軍事機構を強化し、新しい形態で被抑圧民族の労働者階級、農民を搾取・収奪する体制に移行した。このような新植民地主義に對して小ブルの社会主義から独立し、それを越える反帝植民地革命戦争の潮流が成長し、帝国主義支配体制を根底から揺さぶり続けている。

(8) かかる歴史をたどってきた、資本主義の最高度に発展した独占資本主義は、同時に資本主義の生産関係を止揚する物質的基礎を飛躍的に成長させた、死滅しつつある資本主義である。

(9) 第一次大戦後の共産主義運動の大昂揚は、ロシアを除いてことごとく敗北していった。とくに独革命の敗北は、国際共産主義運動に於いては打撃を与えた。この敗北は、修正主義、中間主義に對する党的自立を組織しきせず、プロレタリアートの自然発生性に對する立場もあいまいにしていたことに、主要な原因をみいだせる。三〇年代の危機におこった共産主義革命第二の波も帝国主義に於てはことごとく敗北していった。

米帝では、労働者に對する政治的讓歩とニューデールに、英帝では労働党政権に、プロレタリアートの革命運動を自立させる事がほとんどなし得ず、反ファッショという名の帝国主義戦争に敗北していった。独帝においては「社会ファシズム論」によってファシスト、金融寡頭制に對する前段階階級戦を組織しえず、小ブルを先頭とするファシズム運動の前に武装解体させられていったのである。仏帝においては、反ファッショ人民戦線の中に共産主義運動を溶解させ、スペイン革命においては、更に革命的左翼への武装反革命へととなりさかたつたのである。

(10) 一方ソ連スターリン主義の影響力から相対的な独自性をもって、中国、朝鮮、ベトナム、キューバに労働者階級と農民階級の同盟国家が革命戦争の中でかちとられた。これらの革命的な労働者階級は世界プロレタリアート独裁の道を、世界革命戦争の下に経済建設—文化革命を統合して歩む戦い以外に世界プロ独に至る道はない。この戦いは内外からの反動と日和見主義との徹底した闘い抜きにはありえない。

(11) 帝国主義諸国は相対的な政治的独立を認められた旧植民地諸国に資本を投下し、資本家階級、大土地所有者を育成し、その国家

(12) 戦後体制の危機の構造からして、プロ独—世界革命—暴力革命は以下の政治路線へと具体化せねばならない。階級闘争は世界的に有機的な単一性と同時性をますます強めつつあり、我々は世界プロ独への道をしっかりと歩まねばならない。国独資下における、独占資本家と小所有者を含む他の諸資本家の矛盾からプロ独を否定し、人民民主主義革命を主張する日和見主義に對して、我々は労働者階級のもとへの小所有者を含む全資本家の打倒としてあるプロ独の思想と闘いで解体する。小所有者における、家族奴隷制の問題は、他人の労働の搾取支配と同質構造のものとするからである。又、社会帝国主義に對する闘いはプロレタリアート独裁をめざす政治革命そのものとしてあり、世界革命の重要な任務である。プロレタリアート、被抑圧民族の分断、すなわち革命運動への徹底した弾圧と下層人民の棄民、差別排外主義による社民の育成に對して、徹底して闘いぬき、膨大なプロレタリアート人民の自然発生性を、世界プロ独樹立へと鍛えぬかねばならない。暴力革命をかかげる革命派の一部は、その政治において、一國主義—経済主義—ソビエト—峰起路線という現代教条主義におちこんでおり、これを解体、止揚しなければならぬ。すなわち帝国主義の搾取と収奪、生活破壊に對する、あらゆる労働闘争、社会闘争および政治闘争を、社民、社帝の庄殺をはねかえすプロ独—社会主義を追求する大衆的政治ストライキ、

デモンストレーションあるいは暴動等で闘い抜き、それらを権力闘争へ発展統合させ、又それら総体を革命戦争の軍事路線で闘い抜くこと、ゲリラはかかる軍事路線の戦略的環であり、出発点である。故に、世界プロ独への道は、反帝プロレタリア世界革命戦争である。

### 第三章 党と階級闘争

(1) 党は、プロレタリアートをブルジョアジーの階級的暴力に対して独自の組織的存在として確立することによって、プロレタリアートを即自的な自然発生的な階級から、意識的な強固な階級へと止揚させる。プロレタリアートの階級的団結と、階級的解放の為の闘争の勝利は、この党の存在を不可欠とする。

(2) この党とプロレタリアートの終局目標は、私的所有・階級の廃止と社会革命の完全な勝利・共産主義社会の建設であり、不断に闘われる所有をめぐる闘いの表現としての諸々の闘争・経済闘争およびそこから生じる政策・政府を巡る闘争は、この終局目標の勝利へ向けてプロレタリアートの階級的諸力の結合を強化する為の手段として、党が闘わなければならない重要な任務のひとつである。

(3) 党の闘いはプロレタリアートの階級的自覚を発達させ、その階級的組織化を推進し、そして階級的闘いの真の目標を指示することであり、その為に党はあらゆる階級闘争の現われを指導し、プロレタリアートの解放の為の事業のその内部で闘い、プロレタリアートが階級的意識を獲得する事を援助する。

(4) 党はプロレタリアートの階級闘争の中で、直接的な雇用と賃金の為の闘いとしての経済闘争の自然発生的現われに對しそれと闘うと同時に、その「外部」より賃金制度そのものの廃止の為の階級的任務とその目標を確固とした共産主義政治として注ぎ込まねばならない。党の任務は、労働運動と社会主義との結合を勝ち取ることで

ある。そしてその結合環は階級闘争の諸々の現われの中での党の建設であり、党細胞の存在である。

(5) プロレタリアートの解放の事業はプロレタリアート自身の闘いであり、そしてブルジョアジーの抑圧の手段としての資本制国家を攻撃し政治闘争として政治活動の自由を獲得することがその第一の任務であり、分断された国家に代え、プロレタリアートの国際的な単一なプロレタリアートの政治、権力を樹立することであり、党はこの闘いに全力を傾ける。

(6) ブルジョアジーの独裁政権、資本制国家の行使する搾取、抑圧、侵略および一切の暴力に対して反抗し闘う全ての運動を党は無制限に支持し援助し、その諸階級・諸階層の闘いをプロレタリアートの解放の事業に結びつけ、プロレタリアートの階級的闘いの有力な武器とする。とりわけ今日の貧農・下層農民および都市貧民・ルンペンプロレタリアートの闘いは、プロレタリアートの階級闘争の一部であり、そして民族的解放の闘い、社会的従属・差別との闘いは、プロレタリアートの階級闘争の重要な環であり、また没落する小所有者の闘い、中小工業者、小ブルおよび農民の闘いは、それがブルジョア政府に対する闘いである限りに於いて、プロレタリアートの有力な同盟者であり、党はその闘いを全面的に援助し、その闘いの階級的発展を推進する。全人民的な政治闘争はプロレタリアートの闘いの有力な一部分である。

(7) 党はこれらの任務を闘い抜く為、革命的活動を職業とする者によって継承性を強固に持ち、自然発生的運動に確固たる立場を有し、また秘密活動・非合法活動を当然担い、階級的規律の中で階級軍隊としての組織性を有するものである。そしてこの党はプロレタリアートからはもちろん、他の諸階級の中からも、その党の活動に従事する者を積極的に結集させる。

## 規約草案

### 前文

我々の目的は一切の生産手段の私的所有の廃絶であり、賃金奴隷制の廃止および生産手段の社会的所有の実現であり、すなわち「能力に応じた労働、必要に応じた分配」の階級性の止揚としての共産主義社会の建設である。この目的の表現の為の闘いはすなわち共産主義革命の永続的展開の階級闘争の持続的止揚であり、そして共産主義社会の建設実現化の不可避の過程として、共産主義の低い段階社会主義—プロレタリア独裁を共産主義革命の永続的展開の中で勝ち取らねばならず、とりわけプロレタリア独裁を将に全世界的規模で世界プロレタリア独裁として建設する事は、資本主義の時代に於ける階級闘争のもっとも発展した形態のその永続化としての闘いとして、不断に分配と交換を巡る関係を環に復活して行くであろうブルジョアジー—ブルジョアイデオロギー—所有意識との明確な階級闘争、プロレタリア自己権力と共産主義革命の闘いの防衛の位置として決定的に重要である。

この階級闘争の目的意識的闘いの中で、階級的前衛—プロレタリア革命党の存在は不可避であり、プロレタリアートが自己を階級として組織するには、自己の独自の政党—プロレタリア革命党を他の一切の諸階級諸階層の政党と対決しつつ建設せねばならず、その事は階級闘争の勝利の決定的環である。

我が同盟は、この共産主義社会の建設に向けて共産主義革命を勝利するプロレタリア革命党として自己を打ち鍛える組織であり、同盟員はこの階級の任務を生涯の闘いとして確認し、実践する革命的戦士である。

### 第一章 同盟員

(第1条) 同盟の綱領、規約を認め、共産主義者として自らを政党に組織し、革命運動の最前線で戦い抜き、同盟の一定の組織に加わって闘うものは同盟員である。

(第2条) 同盟への加盟は準同盟員としての一定の活動の内実の評価をもって同盟員2名以上の推薦をうけ、所属細胞が承認し、上部組織の決定を条件とする。

(第3条) 同盟員の権利は次のとおりである。

- ① 同盟の会議、刊行物で討論することができる。
- ② 同盟各機関に対する所定の選挙権、及び被選挙権がある。
- ③ 同盟の各機関・個人に対して意見を述べ、回答を求めることができる。

(第4条) 同盟員の義務は次のとおりである。

- ① プロレタリアートの自然発生的戦いをその内部で戦うと共に、共産主義意識を外部注入し共産主義運動へと高め、同盟の強化と革命運動の発展をかちとる組織的闘いを担うこと。
- ② 党自身の自然発生的性と闘う党のための闘い—党内闘争の積極的翼になること。
- ③ 党のあらゆる決定に従い責任をもつこと。
- ④ 同盟の秘密を厳守すること。

⑤ 同盟以外に関係している一切の組織、団体に関して報告すること。

と。  
⑥ 所定の同盟費を納入すること。

(第5条) 準同盟員は同盟員たろうとし、同盟員2名以上の推薦をうけたものである。

準同盟員は同盟の指導下で大衆闘争と共産主義理論と政党活動を実践的に学び、同盟員への闘いを展開しなければならぬ。

(第6条) 同盟員は退盟することができる。同盟員が退盟したい時は所属細胞または同盟の機関にその事情をのべ承認を求めらる。

(第7条) 退盟した者の再加盟は中央委員会が決定する。

## 第二章 同盟の組織

(第8条) 細胞は同盟の基礎組織であつて、2名以上の同盟員で構成する。細胞は原則として地域、生産点および同盟機関に基づいて組織する。

(第9条) 同盟組織の階級構成は、労働者階級、被抑圧人民、被抑圧民族の比重を不断に高めなければならない。指導機関の構成もまた同じである。

(第10条) 同盟の基本組織は、細胞―地域委員会―中央委員会―中央司令部―大会である。

また、他方、軍事組織としての組織体制を基本形態にも有する。

(第11条) 大会は同盟の最高決定機関であり、原則として一年に一回開催される。大会は中央委員会または二分の一以上の地域委員会の要求によって招集される。特殊な事情の下では、中央委員会の決定によって大会の招集を延期することができる。大会は代議員によ

つて構成される。

(第12条) 大会は次のことを行なう。

- ① 綱領と規約の決定及び改正を行なうことができる。
- ② 同盟の政策を決定する。
- ③ 中央委員及び中央委員候補を選出する。

(第13条) 中央委員会は大会の決定に基づき大会から大会までの期間の決議機関として機能する。

(第14条) 中央委員会は年四回以上開く。

中央委員の三分の一の要求があつたときは、中央委員会を開かなくてはならない。中央委員候補は特殊な場合を除いて、評議権をもつて中央委員会に出席する。しかし、決議権はない。

(第15条) 中央委員会は次のことを行う。

- ① 同盟の重要政策を決定する。
- ② 同盟の中央諸機関、各地方組織の運営状況を検討し、それへの適切な指示と助言を与える。
- ③ 中央司令部部員を選出する。
- ④ 特殊な事情の下では、中央委員候補を中央委員とすることができる。
- ⑤ 統制処分を決定する。
- ⑥ 中央委員、候補は、各地域委員会より選出される。

(第16条) 中央司令部は、同盟の最高機関であり、次の権利を持つ。

- ① 中央諸機関、各地方組織を統括する。
- ② 人事権を掌握する。
- ③ 同盟の各級機関・部局を創設し、また改廃する。
- ④ 財政を管理する。

## ⑤ 同盟を対外的に代表する。

(第17条) 同盟のすべての会議は、全体の過半数の出席をもつて成立し、特に規定のある場合を除き、出席者全員一致で議決される。

(但し、全員一致が決議できない時、特殊で重要な問題については、出席者三分の二の賛成をもつて決議方法を変更することができる。)

## 第三章 同盟の統制と規約

(第18条) 全ての同盟員は、同盟の規約を守らなければならない。

同盟員の義務を守らず、同盟と労働者階級の利益に反した者が出た時は、病をなしておして後の戒めとする。思想にもとづいて教育と統制の闘いを組織する。同盟員に対する教育と統制の闘いは、同盟自身を自己闘争である。

(第19条) 同盟員に対する統制は、その同盟員の所属する細胞で事実に基づいて慎重に審議し、勧告し、上級機関が決定する。

## 通信欄 「暴力」についてもう一度考える

一 新聞記者として

Y・M (東京)

機関からの通達と中央委指示を受け取りました。私の方からの情報報告は、すでに前回の報告書を機関を通じて提出してあります。「殲滅戦」の情報活動の必要が再び叫ばれていますが、今回の報告はその点についての若干の疑問などを述べさせていただきます。

もちろん、あくまで党員候補としての私の目から見た問題提起です。党全体の問題となるかどうかは判りませんが、しかし、私の今いだいている問題が、私の属している候補細胞会議でも一番重要な各人の疑問点となっており、その点が曖昧な為、担当の党員も

(第20条) 統制の内容は活動停止、権利停止である。統制とは問題の根源と克服の道を同盟自身組織的に見出し実行することである。

(第21条) 同盟員の統制を行なう時は、統制を受ける者に弁明の機会を与える。又、統制を受けた同盟員は統制に不服であるならば再審査を求めることができ、中央委員会、中央司令部、大会にいたるまでの上級機関に異議を申請できる。

## 第四章 同盟の財政

(第22条) 同盟の財政は、同盟費、寄付などをもってまかなう。

(第23条) 同盟費は原則として実収入の5%とし、定期的な納入しなくてはならない。

## 第五章 付 則

(第24条) この規約に定められていない問題は、中央司令部が綱領の精神にもとづいて処理する。

私達は党員として推薦し得ない状況となっております。私も、妻子があるから党員活動ができない、という事ではなく、たとえ三十づら

をさげても、この路線的な核心を握む事ができれば、今すぐにも職業革命家への道を選ぶ事ができると思っております。今回は「報告の義務」ではなく「報告の権利」として、私の上申書を考慮していただきたいと思っております。



—「暴力」の正当性とは—

我々にとっての「暴力」とは、やはり絶対悪なものです。「暴力」の自己展開から、何かしら新しい社会なり秩序が生まれてくるというのは、その「暴力」の内包する限界性に対する正当化の言葉にすぎないといえます。

もとより、今日の社会的支配の構造が、物理的「暴力」をも含めた(常備軍警察・軍隊)トータルな「暴力」支配のそれであり、この階級的支配の「暴力」性を打破するには、やはり、それに対する「暴力」を解体する為の「暴力」が、単なる物理的なそれをも含めて必要である事は前提です。

にもかかわらず、しかし、その「暴力」は総体的なものであり、階級の全体的な権力の強固さ、その積極性を表わすものであり、決して、物理的な「暴力」に還元されてはならず、つまりは、社会的な力としての「暴力」であるはずで、権力としての「暴力」は、マハトであり、物理的な「暴力」は、ゲバルトとは区別されなければならず、ゲバルトはあくまでもマハトの一要素であるべきであり、我々が必要とするのは、そのマハトなのです。

それは決して、単なるゲバルトの積み重ねで出来るものではないでしょう。

支配された階級としての「暴力」の蓄積は、その支配が生み出す階級的な怒りや反抗の中にその萌芽があり、支配の暴虐性・非人間性を暴き出しつつ、それに対する抵抗としての社会的・階級的力を拡大させてゆく事に、それへの全ゆる人々の結集を創り出す事に、その発展の唯一の可能性が秘められていたのではないでしょう。この「暴力」の本源の蓄積こそ、逆に、その広範な大衆性と全人民性を生み出す鍵ではないでしょうか。

そして、この広範性の存在が、他方で、独自の権力行使としての目的意識的な「暴力」の蓄積、すなわち系統化された密集した権

—三・二六〇五・二〇闘争の意味について—

私のようにマスコミの世界で、情報と自己の肉体を切り売りしている者にとって、あの三里塚闘争の衝撃はやはり大きなものでした。何十年かぶりで、時の権力の側の政策を阻止もしくは延期させる事を、大衆の力で勝ち取ったのですから。大衆的な闘いの持つ意味を改めて考えさせられました。

私の周りの、いわば意識性を喪失させる事で生きている「パンヤ」連も、その書き送る原稿とは異なる気持ちで、あの「事態」を受けとめていたはずで、

今は、デスクの仕事にまわっている、いわば「チェック」する側に立っている、かつての六〇年安保の経験者である先輩も、先日、二人だけで飲んでる時に、「あれはやはり快挙だよ」と、いたく感激の様子でした。現在の環境で、彼がどの様に内面的に受けとめているのかは判らざりましたが、しかし、少なからぬ影響を数多くの人々に与えている事は事実です。

私は大衆の表力闘争の意味をもう一度考えました。今回の闘いは、あの六八年で終わった。本当の意味での「表力闘争」の延長上に存在するものです。

今、私は「六八年で終わった」と書きました。本来ならば六九年と書くのが、XX派の歴史では正しいのかもしれませんが。しかし、私は「六〇年代末の表力闘争」と呼ばれるものを、その戦術的な面について、もう少し詳しく把え返しておきたいのです。私達が、かつて「表力闘争」を主張し、それを闘争戦術の軸に置いて来たのは、それを絶対的に必要とするひとつの状況がありました。六五年の日韓闘争以降の数年間、デモをする私達にとっては実に屈辱と怒りの日々でした。「当然の権利」であるデモが、機動隊のあのサンドイッチ規制の中で、まるで虫けらのように足蹴にされて踏みじられ、シュプレヒコールをひと声あげれば殴られ蹴られるという、自分の身体で悔しさを確認して来た時代です。

力—前衛の組織的「暴力」と、階級闘争の決定的時点で結合している時、それが真の、そして唯一の「階級的暴力」として、新たな社会の創出の「助産婦」の役割を果たすのではないのでしょうか。この、他方で、前衛の「暴力」も、単なる物理的なそれではなく、未来へと通じる、権力性としての表現であり、その環は、あくまでもその一貫性と強固さにあるはずで、組織的力の蓄積と、いかなる闘いにも耐えうる内実の建設にあるはずで、

そして、一方の、大衆の基盤での「暴力」とは、その受動性と自発性と、そして防衛性という基盤のそれであり、それは、大衆のゆるぎない勇気と決断力の表現としてあるはずで、

支配する側の「暴力」も、その直接的行使には一定の根拠を彼らなりに必要とします。まして、我々の側の「暴力」は、その「暴力」性の行使については、それを当然としうる客観的な情勢、その「暴力」に対しての有形無形の支持を大衆が与え得る必然性、そして、いかなる人々をも感動させ得る勇気と決断力が要求されているとは言えないでしょうか。

これらの事を短絡させて、警察官を一人二人殺す事が革命戦争であり、爆弾を数回爆発させる事が内戦であるなどとしてしまふ事は、やはり「暴力」の退廃を生んでいくと思えます。

党が闘い、そして現在蓄積している「暴力」は、それらと異質な地平であり、そうであるが故の持久性としての困難さを表現している事は、充分承知をしているのですが、しかし他方で、これらのいわば「暴力」の退廃の傾向が再び現われているようであり、党の指示する「織波戦」の方針が、ともすれば、この様な「戦闘主義」にも受け取られる危険性があるとも感じますので、その点を再度整理したいと思つた次第です。

「暴力」を技術と考えるのではなく、それを政治力、すなわち一個の権力のそれとして考えるべきです。

わずかの人間で、その弾圧を受けながら、活動をしてきた者にとって、自分達自身の人間性をもう一度と戻す為には、どうしてもあの機動隊の壁をはねのけざるを得なかったのです。いや、とにかく、自由にデモがしてみなかつたのです。そこにこそ、ゲバ棒という原始的武器での、本来のデモをとりもどす闘い、表力闘争が、私達の固い決断として登場せざるを得なかつたのです。殴られ続けてきた者にとって、本当に生命がけで、機動隊の大きな身体の壁に、ひるむ事なく、真実突入し、そしてそれを突破して来たのです。そこから、何かしらの意味が生まれて来ると考えたのは、その後の合理化の為でしょう。

六七年の一〇・八からの羽田闘争—エン・ブラ闘争—王子闘争—成田闘争、この半年間の、本当に連日にわたるゲバルトの闘いは、その私達の最低の意思表示であり、それ故に、私達自身の決意や意識も強固なものであり、どんづまりの者の握ったゲバとして、カンパニア的ではなく、まっしぐらに機動隊にむかっていったのです。しかし、六八年の半ばから、一方で戦列の広がりとは裏腹に、そのゲバルトの質が大きく変りました。いつのまにか「ゲバスタイル」と呼ばれるものが生まれ、一種の流行としてそれが受け入れられはじめた。そこからは安易に突込み簡単に敵をうしろにして逃げるという、そんなゲバルトへと変質していったのです。逃げるならば何の為にゲバ棒を持ったのか。それが私の疑問でした。新しく戦列に加わった者達には、機動隊への憎しみが単なる直接的なものでしなく、それとの闘いで自己を検証してゆくなどという観点は皆無でした。この頃からです、党派の機関紙が「断固」と「大勝利」という誇大広告に変わっていったのは。

意識ある人には、すでにこの変質は判っていた筈です。しかし、それを直視する事ができず、問題を曖昧にしたまま、逆に大衆の中に逃げこんだ、それが六八年—六九年の「大学闘争」ではなかつたでしょうか。そこでの多くの意味をも政治的に解決する事なしに、いわば「ゲバルトの自然発生性」に乗り移り、実に無残な敗北を喫

したのが、六九年の四・二八であり十一月ではなかったでしょうか。確固たる信念と核心を持ち得ない実力闘争は、ただ無益な疲労感だけを残しました。真にそれが要求されている時にのみ、大衆闘争での実力行使は、真の戦闘性と、そして広範性を持つものです。戦術主義、すなわち「暴力」の退廃がそこに生み出されており、それを止揚し得ない政治性の限界が、やはりそこにはあったのではないのでしょうか。それに気付くには、七〇年というのは、やはり、二年も遅れてしまっていたのです。

六九年の無残な「暴力」主義の退廃は同時に私の大衆闘争からの離脱の時でもありました。私にも、単純なゲバルト主義を、次の政治的力へと引き上げる為の、それを押さえるだけの政治性がなかったのです。

戦術主義から唯武器主義への転落、それは決定的には連合赤軍でその結論を明らかにしました。

今日の党が、そこからの出発を、単にイデオロギーの総括ではなく、実践の総括として出発をして来た事の、大きな意味はここにあると思いますし、それ故に、私の党への支持があるのです。

今日、多くの人が「大衆的実力闘争」の限界を語ります。しかしそれが戦術の技術でのそれであるならば、やはり大きな問題があります。三里塚での第四インター等の実力闘争を真に組織した人達が、たとえ十年遅れであり、六〇年代後半での実力闘争を何ら担わなかったから今日再びあの種の闘いができたのであれ、しかし、是非とも突入せねばならないという、大衆的意識での強固さと信念があれば、そしてそれを容認しうる情勢があれば、大衆的実力闘争であったとしても、その一定の意義は創り得るのだという事を、再度証明したのではないのでしょうか。

もちろん第四インター等も今後の闘いで、その本当の総括が要求され、果してそれに生き残り得るのかどうかは疑問です。

しかし、「暴力」が政治力であり、思想であり、そして核心であればある程、それを、戦術で理解するのではなく、総体的情況で総括

する事が必要です。

我々の核心とする「最後の暴力」である、共産主義の側からの軍事についても、まったく同じ事でしょう。

その積極性、一貫性、そして攻撃性は、他方の、大衆闘争の「暴力」の、その受動性、自発性、そして自衛性との結合を内包する事によつてのみ唯一存在する事ができます。

そして、その結合は、やはり我々が創り出す情勢に大きく規定されているはずで

結論を急ぎます。

我々が大衆闘争と接する時、大衆闘争それ自身に何かしらの「戦闘」や「攻撃」を意味付与するのは誤っています。それはあくまでも大衆に委ねるべきです。戦術で指導結合すべきではなく、政治すなわち路線で結合すべきです。そこに政治指導が存在するはずで

そして、大衆闘争の戦術的闘争は、やはり防衛的な、つまりは自己の当然の権利を守る闘いとしてのそれであるでしょう。そこにこそ大衆闘争の大胆さがあるはずで

もし共産主義と党の、その最高の戦術的展開である「殲滅戦」を悪無限的に大衆に押し付けるのだとしたら、それは逆に、共産主義運動の退廃を生んでいくでしょう。

革命軍—軍事と戦闘の混乱という連合赤軍のあの悲劇を再現するでしょう。

今日の中央軍や党員の人達が、この数年間、その軍事蓄積をじつとこらえてやり続けて来た、その苦勞が判るだけに、安易な「攻勢」は厳につつしむべきだと、私は真剣に考えています。

中央の皆さんの充分なる御配慮を再度おねがいしたいと思います。

(以上)

- 20

